

目次

序論	1
第1章 “是……的”構文の先行研究と研究方法	4
1.0 はじめに	4
1.1 “是”に関する研究	4
1.1.1 朱德熙(1982)の記述	4
1.1.2 李临定(1986)の記述	5
1.1.3 张和友(2012)の記述	10
1.1.4 本論文の捉え方	14
1.2 “的”に関する研究	15
1.2.1 朱德熙(1978・1982)の記述	15
1.2.2 宋玉柱(1981)、马学良・史有为(1982)の記述	16
1.2.3 牛秀兰(1991)の記述	16
1.2.4 李纳・安珊笛・张伯江(1998)の記述	17
1.2.5 袁毓林(2003)の記述	18
1.2.6 杨凯荣(2016)の記述	18
1.2.7 杉村博文(1999)の記述	19
1.2.8 本論文の捉え方	20
1.3 研究方法	21
1.3.1 命題論理	21
1.3.2 述語論理	22
1.3.3 命題と可能世界	23
1.3.4 本論文における論理式	25
1.4 本章のまとめ	25
第2章 “是……的”構文の演算成立過程と論理分析	27
2.0 はじめに	27
2.1 各成立過程の理論的背景	27
2.1.1 第一過程「格役割演算」	27
2.1.2 第二過程「時間点演算」	28
2.1.3 第三過程「様相演算」	28
2.1.3 第四過程「焦点演算」	28
2.2 焦点化“是……的”構文の成立過程	29
2.2.1 第一過程「格役割演算」の論理式による分析	29

2.2.2	第二過程「時間点演算」の論理式による分析	31
2.2.3	第三過程「様相演算」の論理式による分析	33
2.2.4	第四過程「焦点演算」の論理式による分析	34
2.2.5	各演算の成立過程	35
2.3	各演算の全体の論理式	37
2.3.1	“我是昨天进的城。”の論理式	37
2.3.2	“小王是第一个跳下去的。”の論理式	38
2.3.3	“王大夫是用中草药治好关节炎的。”の論理式	39
2.4	“是……的”構文の「連鎖関係」	40
2.4.1	“我是昨天进的城。”の連鎖関係	41
2.4.2	“小王是第一个跳下去的。”の連鎖関係	41
2.4.3	“王大夫是用中草药治好那个病人的关节炎的。”の連鎖関係	42
2.5	本章のまとめ	42
第3章	焦点の意味の諸相における意味操作と論理分析	43
3.0	はじめに	43
3.1	“是……的”構文における焦点	43
3.1.1	刘丹青・徐烈炯(1998)の記述	43
3.1.1.1	「自然焦点」	43
3.1.1.2	「对比焦点」	44
3.1.1.3	「話題焦点」	44
3.1.2	徐杰・李英哲(1993)・徐杰(2001)の記述	45
3.1.3	何元建(2011)の記述	46
3.1.4	袁毓林(2012)の記述	47
3.1.5	杉村博文(1999)の記述	48
3.1.6	青木萌(2017)の記述	49
3.1.7	本論文の捉え方	50
3.1.8	“是……的”構文における「断定焦点」とは何か	50
3.1.9	「断定焦点」による考察	51
3.1.10	本節のまとめ	52
3.2	「位置置換文」における焦点	53
3.2.1	位置置換文とは	53
3.2.2	位置置換文の特徴	54
3.2.3	本論文の捉え方	55
3.2.4	「情報焦点」とは何か	55
3.2.5	焦点の定義	56

3.2.6 「位置置換焦点」の意味操作と論理分析	57
3.2.6.1 位置置換焦点が“主語”の意味操作と論理分析	57
3.2.6.2 位置置換焦点が“状況語（大概/已经/还）”の意味操作と論理分析	61
3.2.6.3 位置置換焦点が“受け手主語”の意味操作と論理分析	66
3.2.6.4 位置置換焦点が“前置詞句”の意味操作と論理分析	68
3.2.6.5 位置置換焦点が“主語と前置詞句”の意味操作と論理分析	71
3.2.6.6 位置置換焦点が“都”（範囲副詞／既に）の意味操作と論理分析	72
3.2.6.7 位置置換焦点が“就（もう）”の意味操作と論理分析	74
3.2.6.8 位置置換焦点が“快（まもなく）”の意味操作と論理分析	76
3.2.6.9 本節のまとめ	77
3.3 本章のまとめ	77
第4章 時態成分“了”が共起する場合の意味と論理分析	78
4.0 はじめに	78
4.1 時態とは	78
4.1.1 陈平(1988)の時態の捉え方	78
4.1.2 龚千炎(1995)の時態の捉え方	79
4.1.3 本論文の時態の捉え方	80
4.2 時態成分“了”に関する考察	80
4.2.1 吕叔湘(1980)の記述	81
4.2.3 张晓玲(1986)の記述	81
4.2.3 刘勋宁(1988)の記述	81
4.2.4 杉村博文(1994)の記述	81
4.2.5 龚千炎(1995)の記述	83
4.3 “是……的”構文における“了”の論理分析	85
4.3.1 「完了・実現時態」成分：“领略了・奥妙了”の論理分析	85
4.3.1.1 「第一過程」における分析	86
4.3.1.2 「第二過程」における分析	86
4.3.1.3 「第三過程」における分析	88
4.3.1.4 「第四過程」における分析	88
4.3.1.5 各演算の全体の論理式	89
4.3.2 「完了・実現時態」成分：“吃了・死了”の論理分析	90
4.3.2.1 「第一過程」における分析	90
4.3.2.2 「第二過程」における分析	91
4.3.2.3 「第三過程」における分析	93

4.3.2.4	「第四過程」における分析	93
4.3.2.5	各演算の全体の論理式	94
4.3.3	「完了・実現時態」成分：“ <u>来</u> 了・ <u>医</u> 生了”の論理分析	95
4.3.3.1	「第一過程」における分析	95
4.3.3.2	「第二過程」における分析	96
4.3.3.3	「第三過程」における分析	97
4.3.3.4	「第四過程」における分析	98
4.3.3.5	各演算の全体の論理式	98
4.4	本章のまとめ	100
第5章	時態成分“着”が共起する場合の意味と論理分析	101
5.0	はじめに	101
5.1	時態成分“着”に関する考察	101
5.1.1	呂叔湘(1980)の記述	101
5.1.2	龚千炎(1995)の記述	101
5.1.3	陆俭明(1999)の記述	102
5.1.4	木村英树(1983)の記述	103
5.1.5	杉村博文(1994)の記述	103
5.2	“是……的”構文における“着”の論理分析	104
5.2.1	「時態+時制」の“在”と共起する“着”の論理分析	104
5.2.1.1	「第一過程」における分析	104
5.2.1.2	「第二過程」における分析	105
5.2.1.3	「第三過程」における分析	107
5.2.1.4	「第四過程」における分析	107
5.2.1.5	各演算の全体の論理式	108
5.2.2	「時態+時制」の“在”と共起しない“着”の論理分析	109
5.2.2.1	「持続時態」成分：“ <u>照</u> 着”の論理分析	109
5.2.2.1.1	「第一過程」における分析	110
5.2.2.1.2	「第二過程」における分析	111
5.2.2.1.3	「第三過程」における分析	112
5.2.2.1.4	「第四過程」における分析	113
5.2.2.1.5	各演算の全体の論理式	113
5.2.2.2	「持続時態」成分：“ <u>湊</u> 合 <u>着</u> ”の論理分析	115
5.2.2.2.1	「第一過程」における分析	115
5.2.2.2.2	「第二過程」における分析	116
5.2.2.2.3	「第三過程」における分析	118

5.2.2.2.4	「第四過程」における分析	118
5.2.2.2.5	各演算の全体の論理式	119
5.3	本章のまとめ	120
第6章	時態成分“ <u>过</u> ”が共起する場合の意味と論理分析	121
6.0	はじめに	121
6.1	時態成分“ <u>过</u> ”に関する考察	121
6.1.1	张晓玲(1986)の記述	121
6.1.2	龚千炎(1995)の記述	123
6.1.3	杉村博文(1994)の記述	124
6.1.4	松村文芳(2017)の記述	124
6.2	“是……的”構文における時態成分“ <u>过</u> ”の論理分析	125
6.2.1	「経験時態」成分：“ <u>有过</u> ”の論理分析	125
6.2.1.1	「第一過程」における分析	126
6.2.1.2	「第二過程」における分析	126
6.2.1.3	「第三過程」における分析	128
6.2.1.4	「第四過程」における分析	129
6.2.1.5	各演算の全体の論理式	129
6.2.2	「経験時態」成分：“ <u>商量过</u> ”の論理分析	130
6.2.2.1	「第一過程」における分析	131
6.2.2.2	「第二過程」における分析	131
6.2.2.3	「第三過程」における分析	133
6.2.2.4	「第四過程」における分析	134
6.2.2.5	各演算の全体の論理式	135
6.2.3	「経験時態」成分：“ <u>吃过</u> ”・“ <u>看过</u> ”の論理分析	136
6.2.3.1	「第一過程」における分析	136
6.2.3.2	「第二過程」における分析	137
6.2.3.3	「第三過程」における分析	138
6.2.3.4	「第四過程」における分析	139
6.2.3.5	各演算の全体の論理式	140
6.3	本章のまとめ	142
第7章	“是……的”構文における「様相」と「時態」の意味と論理分析	143
7.0	はじめに	143
7.1	様相論理とは何か	143
7.2	様相成分と時態の関係	145

7.2.1 様相成分“可以”・“一定”・“不”の意味及び時態との関係	145
7.2.1.1 「未然時態」と関わる場合	145
7.2.1.2 「単純時態」と関わる場合	146
7.2.1.3 「已然時態」・「単純時態」・「未然時態」と関わる場合	146
7.2.2 様相成分“知道”・“同意”・“需要”・“容易”の意味及び時態との関係	146
7.2.2.1 「已然時態」・「単純時態」と関わる場合	146
7.2.2.2 「単純時態」・「未然時態」と関わる場合	147
7.2.2.3 「已然時態」・「単純時態」・「未然時態」と関わる場合	148
7.2.3 様相成分“会”・“要”の意味及び時態との関係	148
7.2.4 本節のまとめ	153
7.3 時態と関わらない様相成分についての考察	154
7.3.1 時態と関わらない“挺”の場合	154
7.3.2 時態と関わらない“有”の場合	155
7.3.3 時態と関わらない“賛成”の場合	155
7.4 本章のまとめ	155
結び	157
表一覧	160
図一覧	160
注釈	162
参考文献	165

序論

1. 本研究の意義

これまで多くの研究者が“是……的”構文の形成や用法などについて、様々な議論を展開してきたが、主として形式構造に注目し、意味については詳述されていないことが多い。本論では、“是……的”構文を形式意味論の枠組みで分析し、各演算の成立過程を論理式で示すことにより、この構文を形式だけではなく、目に見える論理式で意味表現することにより分析を行う。

2. 考察の対象

本研究では「現代中国語の焦点の意味の諸相」について「是……的」構文の意味と論理」を中心として研究してゆきたい。

現代中国語の中で“是……的”構文の成立については各研究者の着眼点が異なる、注目すべきは朱德熙(1978)、袁毓林(2003)、张和友(2012)の観点である。

“是……的”構文の成立過程に関しては、朱德熙(1978)が「S1-S4によって構成される」という観点を主張し、袁毓林(2003)は「先に“的”が成立し、その後に“是”が派生する。成立過程は二つのクラスによる」と述べ、张和友(2012)は“是”構文を典型的“是”構文、準典型的“是”構文、非典型的“是”構文に分けた^(注1)。

これらの観点を総合して、本研究においては、张和友(2012)の「非典型的“是”構文」をヒントとして、「先に“的”後は“是”」の方向から分析してゆきたい。一方、袁毓林(2003)が主張している二つの派生過程と異なり、ここでは“是……的”構文は四つの過程を経て成立すると考えている。これらの理論について考察し、“是……的”構文の成立過程と基本的な論理構造を示す。

3. 研究方法

研究の方法としては形式意味論の枠組み、すなわち、自然言語の表現を直接解釈するのではなく、一旦仲介の形式言語の表現に翻訳し、それを意味規則に従って解釈するという方法を選択する。いわゆる、形式意味論では「構成性の原理」に基づいて命題論理、述語論理などの形式言語が用いられる。

まず代表的な“是……的”構文の各用例あるいは各構成要素に対する深い意味の洞察、分析を行う。次に、そこから得た意味内容を、述語論理を用いて精密に記述し、“是……的”構文あるいは各構成要素の意味記述モデルを打ち立てる。それに基づき、採取した様々なバリエーションの“是……的”構文の実例に適用し、意味記述モデルの妥当性を論証する。

4. 論文構成と各章の内容

本研究は現代中国語における「焦点の意味の諸相」について“是……的”構文を中心とした研究であり、七つの章によって構成される。ここで、各章の内容を簡単に紹

介しておこう。

第1章 “是……的”構文の先行研究と研究方法

第2章 “是……的”構文の演算成立過程と論理分析

第3章 焦点の意味の諸相における意味操作と論理分析

第4章 時態成分“了”が共起する場合の意味と論理分析

第5章 時態成分“着”が共起する場合の意味と論理分析

第6章 時態成分“过”が共起する場合の意味と論理分析

第7章 “是……的”構文における「様相」と「時態」の意味と論理分析

まず、第1章では、先行研究者が“是……的”構文を如何に解釈しているのかを確認し、“是”と“的”各部分に関する研究、及び“是……的”の成立過程に関する研究について、これらにおける代表性のある先行研究を紹介する。さらに、その記述の中から検討の余地がある点、及びそれに対する本論の捉え方について提示する。最後に、本研究で用いられる研究方法(即ち、形式意味論の方法)について述べる。

第2章では“是……的”構文の演算過程について述べる。「格役割演算」、「時間点演算」、「様相演算」、「焦点演算」という四つの過程を経て成立していると考ええる。

第3章では焦点について検討する。ここでは論点を“是……的”構文と「位置置換文」の二つに分けることとする。

まず、第一節の論点は“是……的”構文の焦点である。そこで、主に刘丹青・徐烈炯(1998)と袁毓林(2003)の焦点に関する論考に基づいて、本論の“是……的”構文における焦点の分析法を提示し、論理式を用いて分析する。また、この節の考察で採用した「±突出性」・「±排他性」という概念は“是……的”構文以外の言語現象にも説明として用いることができる。

第二節では「位置置換焦点」を論点として検討する。刘丹青・徐烈炯(1998)と徐烈炯(2002)の分析法を基に、陆俭明(1993)が主張している位置置換という現象に対し、後置された部分を「焦点」と見なし、陆俭明(1993)が言及していない「意味操作」の角度に着目にして「位置置換現象」を考察する。最終的に、第一節の考察で採用した焦点の分析法が「位置置換文」に適用できることを論じる。

第4章から第6章では、“是……的”構文の中で、「時態」を表す“了”、“着”、“过”それぞれの成分について述べる。杉村博文(1998)“是……的”構文の成立は、“了”を削除した後に“的”を付けることができる。すなわち、“了”と“的”が一つの文中に共存することができないと主張している。しかし、本論では、これらの成分が共に“是……的”構文の中に存在することができると考える。

最後に第7章は“是……的”構文における「様相」と「時態」について検討する。ここでは、主に「必然性」、「可能性」を表す成分“会”、“要”、“可以”、“一定”などについて意味の確定と論理分析を行う。さらに、これらの成分と「時態」の間どのような関係が存在するかを時間軸で詳しく論じる。

第1章 “是……的” 構文の先行研究と研究方法

1.0 はじめに

本章は従来の研究者が“是……的”構文について如何に解釈しているのかを確認し、“是”と“的”それぞれにおいて各成分の捉え方、及び意味解釈について検討する。

現代中国語の文法研究において、一般的に“是”構文は「判断文」として扱っているが、ここでは“是”を判断と見なさない。まず、朱德熙(1982)と张和友(2012)による“是”の記述について取りあげる。朱德熙(1982)は「動詞“是”を中心に構成された述語」と述べており、张和友(2012)は、“是”は断定であり、この場合の断定は意味文法範疇として扱っている。更に、“是”の「焦点標識」の機能についても述べている。

“的”構文の研究には、これまで様々な議論が展開されてきた。しかし、各研究者の注目する角度によって、また、“的”の生起位置によって、どのような意味役割を示しているのか、また“的”はどのような機能を持つかについて、一致した見解は得られていない。本章では、意味構造の研究の中から、本論文が参考とした研究を取りあげる。

1.1 “是”に関する研究

1.1.1 朱德熙(1982)の記述

朱德熙(1982)は、「動詞“是”を中心に構成された述語」において、「“是”の後に来る目的語は体詞性成分であってもよいし、述詞性成分であってもよい」と述べる(朱德熙 1982: 105)。次の(1)-(12)は体詞性目的語の例である。(1)-(6)の「主語と目的語は、意味上、類とその成員の関係(包摂関係)にある」と指摘している(朱德熙 1982: 105)。

- | | | |
|------------------------|-----------------------|---------|
| (1) 他是 <u>外科大夫</u> | (かれは外科医だ) | 「名詞」 |
| (2) 语言是 <u>工具</u> | (言語は道具だ) | 「名詞」 |
| (3) 昨天是 <u>星期天</u> | (昨日は日曜日だ) | 「時間詞」 |
| (4) 我关心的是 <u>现在</u> | (私が関心をもっているのはただいま現在だ) | 「時間詞」 |
| (5) 这杯水是 <u>干净的</u> | (この水は清潔なものだ) | 「“的”構造」 |
| (6) 这件毛衣是 <u>他自己织的</u> | (このセーターは彼が自分で編んだものだ) | 「“的”構造」 |

(朱德熙 1982: 105 ; 日本語訳は朱德熙著、杉村博文・木村英樹訳 1995: 134-135。

太字および下線は筆者。)

次の(7)は「主語と目的語が『同一関係』にある場合」である。(8)-(9)は「主語が場所詞で、存在を表す」例である。(10)-(12)は「主語と目的語の関係が単純な包摂関係でもなければ同一関係でもない場合」で、「この種の文の意味は具体的なコンテキスト

に基づいてはじめて確定できる」。

- (7) 红楼梦的作者是曹雪芹 (『紅樓夢』の作者は曹雪芹である)
(8) 门外是条河 (門の外は一本の川である)
(9) 东边是一块玉米地 (東側は一枚のとうもろこし畑である)
(10) 我是中文系，他是历史系 (私は中文学科で、彼は歴史学科である)
(11) 我是炸酱面 (私はジャージャンメン (中華味噌かけメン) だ)
(12) 他是两个男孩儿 (彼は男の子が二人だ。)

(朱徳熙 1982: 105 ; 日本語訳は朱徳熙著、杉村博文・木村英樹訳 1995: 135。

太字および下線は筆者。)

次の(13)-(17)は述詞性目的語の例である。朱徳熙(1982)は「目的語が述詞である場合はしばしば対比を表す」とし、(15)のように「主語と目的語が同形であれば、譲歩を表し、“虽然”(……だけれども)“尽管”(……であるといはいえ)という意味をもつ」と指摘している(朱徳熙 1982: 105)。

- (13) 他是去接人，不是去送人

(彼は人を迎えに行くのであり、人を送りに行くのではない)

- (14) 我是不知道 (私は知らなかったのだ (故意ではない))

- (15) 好是好，就是不太结实。 (よいことはよいが、ただあまり頑丈ではない。)

(朱徳熙 1982: 105 ; 日本語訳は朱徳熙著、杉村博文・木村英樹訳 1995: 135。

太字および下線は筆者。)

また動詞“是”を中心に構成される述語の“是”は基本的に軽声、すなわちストレスを置かずに発音されるが、(16)-(17)のような例においては、「“是”にストレスを置いて発音すると「確かにそのとおりだ」という意味を表す」と指摘している(朱徳熙 1982: 105)。

- (16) 他 ‘是去接人 (彼は人を迎えに行くのだ)

- (17) 我 ‘是不知道 (私は知らなかったのだ)

(朱徳熙 1982: 105 ; 日本語訳は朱徳熙著、杉村博文・木村英樹訳 1995: 135。

太字および下線は筆者。)

1.1.2 李临定(1986)の記述

李临定(1986)は、“是”の文型について詳しく分類した。その概要を表で示すと次の〈表 1-1〉のようになる。

“是”の文 型	タイプ	例文
<p>[1] 名 1 +是+名 2</p>	<p>① [名詞 1] と [名詞 2] は同一であり、二者の前後の位置が交替することが可能。</p> <p>② [名詞 1] : 固有名詞</p> <p>③ [名詞 1] と [名詞 2] : 時間詞</p> <p>④ [名詞 1] と [名詞 2] : 場所詞</p> <p>⑤ [名詞 2] には数量成分がある。或いは [名詞 1] と [名詞 2] は同じ数量成分を持つ。</p> <p>⑥ [名詞 1] 或いは [名詞 2] が序数、或いは分項の数量である場合。</p> <p>⑦ [名詞 1] と [名詞 2] の中心語が同等である場合。</p> <p>⑧ 一定の条件の中で、[名 1] と [名 2] は同等を規定されている。(誇張の修辞用法)</p> <p>⑨ [名詞 2] は偏正構造の場合。</p> <p>⑩ [名詞 2] は総括の類であり、 [名詞 2] はその中のメンバーである。</p> <p>⑪ [名 1] と [名 2] の関係は</p>	<p>① <u>昨天找你的人</u>就是<u>我</u>。 ⇨ <u>我就是昨天找你的人</u>。</p> <p>② <u>老程</u>是<u>王家的车夫</u>。(老舍) ⇨ <u>王家的车夫</u>是老程。</p> <p>③ <u>明年</u>是<u>五年计划的最后一年</u>。 ⇨ <u>五年计划的最后一年</u>是<u>明年</u>。</p> <p>④ <u>这里</u>不是<u>开会的地方</u>。 ⇨ <u>开会的地方</u>不是<u>这里</u>。</p> <p>⑤ <u>凶手</u>是<u>一个外地人</u>。 ⇨ <u>一个外地人</u>是凶手。..</p> <p>⑥ <u>北京队</u>是<u>第一名</u>。 ⇨ <u>第一名</u>是<u>北京队</u>。</p> <p>⑦ <u>旗杆院的房子</u>是<u>三里湾的头等房子</u>。 ⇨ <u>三里湾的头等房子</u>是<u>旗杆院的房子</u>。</p> <p>⑧ <u>他的意见</u>就是<u>法律</u>。(曹禺) ⇨ <u>法律</u>就是<u>他的意见</u>。</p> <p>⑨ 你是什么意见。⇨你的意见是什么? ⇨什么是你的意见。</p> <p>⑩ <u>小张</u>是<u>演员</u>。⇨<u>小张</u>是一个<u>演员</u>。 ⇨(有)一个<u>演员</u>是<u>小张</u>。</p> <p>⑪ <u>他</u>是<u>十岁</u>。 ⇨他[的年龄]是<u>十岁</u>。 ⇨<u>十岁</u>是他的年龄。(年齢)</p>

	<p>様々である。</p> <p>(例：演じる役割、年齢、長幼の順序、値段、枚数、服装、関係、修飾)</p>	
<p>[2] 名……+就 (又) + 是+名数</p>	<p>[名数] は動量詞であり、[名詞] の後によく介詞フレーズなどがある。(一定の習慣性がある。)</p>	<p>小刘亲昵地照着我就是一拳。</p>
<p>[3] 是+ 名, ……</p>	<p>名詞は時間詞を表す。</p>	<p>不是星期日还着急呢。(相声)</p>
<p>[4] 名处 +是+名</p>	<p>①「名詞場所」と「名詞」共に一般性である。</p> <p>②「名詞場所」の前に“満”、“通”、“遍”などがあり、“是”の前に“都”、“皆”、“全”などがある。(誇張)</p> <p>③名詞の前に“一片”、“一团”など多量を表す修飾成分がある。(誇張)</p>	<p>①山坡上是栗子树。</p> <p>②<u>满</u>巷里都是集合的士兵。 <u>通</u>身都是黑色。 <u>遍</u>地皆是落叶。 村子的周围<u>全</u>是水。</p> <p>③村子里是白茫茫的<u>一</u>片水。 眼前是<u>一</u>团漆黑。</p>
<p>[5] …… <u>的</u>+是+名</p>	<p>①「……<u>的</u>+是+」</p> <p>②「……<u>的</u>+是+動/小句」</p> <p>③「……<u>的</u>+是+地方/時候」</p> <p>④「名1+有・<u>的</u>・是+名2」</p>	<p>①我最佩服的是你。≠你是我最佩服的。</p> <p>②更让她难过的是没地方去诉委屈。 ≠没地方去诉委屈是更让他难过的。</p> <p>③你来的真是时候，我们正要找 你。</p> <p>④反正我们有的是茶。(老舍) ≠反正我们的茶有的是。</p>
<p>[6] 名+ 是+動/小 句</p>	<p>“動”、“小句”の文法機能は一つの名詞と同じである。“什么”を用いて質問することができ、また、“是”の前後の部分は同等であり、お互いに位置を置換す</p>	<p>他的缺点是听不进去意见。 ≠听不去意见是他的缺点。</p>

	ることができる。	
[7] 动/小句+是+名	“动”、“小句”の文法機能は名詞と同じである。“是”の前後の部分はお位置を置換することができる。	刻苦学习是青年人的一条正路。 ≠青年人的一条正路是刻苦学习。
[8] 动/小句+是+动/小句	“是”の前後の部分は同等であり、お互いに位置を置換することができる。	你这样做就是你支持我们。 ≠你支持我们就是你的这样做。
[9] 名+是+动		不是，她是想我妈。
[10] 名+是+形	①この場合の否定形は、否定と肯定を並列 で使うことである。 ②“是”の前は“小句”である。	①饭不是软，是硬。 ②他讲话是慢。
[11] 名+是+小句		我们是两厢情愿。
[12] 名+是+……的	①……的”の後ろに名詞を加えるかもしれない。（“是”の前の名詞と同じ、或いは異なる。） ②“的”の前は名詞である。 ③“的”の前は形容詞である。 ④非述語・非形容詞も“的”の前に置かれる ⑤“的”の前に動詞句がある。 ⑥“的”の前がセンテンスである。 ⑦“的”の前が動詞である。（動詞句） ⑧“的”の前が形容詞である。（形容詞の前はよく付加成分が	①书是他的。⇒书是他的书。 ≠书是一本你的。 ②那是木头的。⇒那是木头的床。 ⇒那是一张木头的。 ③那件衣服是旧的。⇒那件衣服是旧的 的衣服。⇒那件衣服是一件旧的。 ④这表是自动的。 ⑤他是教书的。⇒他是教书先生。 ⇒他是一位教书的。 ⑥这是弟弟寄来的。⇒这是弟弟寄来的包裹。⇒这是一包弟弟寄来的。 ⑦我是一定答应你的。≠我是一定答应你的人。≠我是一个一定答应你的。

	ある。)	⑧他的经验是相当丰富的。
[13] 名受 + 名施 + 是 + 动 + 的	動詞の前はしばしば前置詞句、 或いは時間詞がある。[名受] は “的” の後ろに移動することが 可能。	这本书我是从西单买的。 ⇒我是从西单买的这本书。
[14] 名受 + 是 + 名施 + 动 + 的	[名受] は“的” の後ろに移動 することができる。	牛奶是姐姐做的，可可是哥哥做 的。 ⇒是姐姐做的牛奶，是哥哥做的可 可。
[15] 是 + 名 + 动		是他拿走了我的笔。
[16] [只 要] + 是 + 名施 + 都 (就) + 动	[名施] の後ろで停頓ができ る。	只要是人都做得了。
[17] [只 要] + 是 + 名受 + [名 施] + 动		只要是对群众有益的事情我都干。
[18] 是 + 名受 + [名 施] + 动		是什么方案还没定下来？ 是改建厂房的方案还没定下来。
[19] 是 + 名施 + 就 (才) + 动 + 名受	① [名施] と [名受] の前に同じ 修飾語が ある。しばしば“什 么” を使用する。 ② 否定形るとき、必ず前後共に 使用する。	① 是什么人就说什么话。 ② 不是好的种子就结不出好的果 实。
[20] …… + 是 + 介 + ……	介詞の後ろに動詞でも良い、主 述句、或いは名詞句でも良い。 ① 名 + 是 + 为了 + 动 1 + 动 2 ② 名 + 动 2 + 是 + 为了 + 动 1 ③ 名 + 动 2 + 为的 + 是 + 动 1 ④ 名 + 是 + 因为 + 动 1 + 动 2	① 他是为我们拉扯的抱不平。(老 舍) ② 我不是来讲话，我来是为了拜 师。 ③ 我这么早来，为的是跟你说两句 话儿。 ④ 小媳妇大概是因为多眨巴了两次

⑤名+动2+是+因为+动1 ⑥名+动2+是+因为+动1+的+缘故 ⑦是+因为+动1+名+才+动2 ⑧名+之所以+动2+是+因为+动1 ⑨前置詞は“在”、“沿着(顺着)”、“冲着”、“经过”、“按照”、“趁”などがある。 この中の「是+前置詞」は二つの位置がある。(動詞の前或いは後ろである)	眼睛，小产了！ ⑤我饿肚子是因为什么啦？ ⑥他摔倒是因为不小心的缘故。 ⑦就是因为这个问题，我才想要来和你谈。 ⑧国产品之所以多，是因为华侨欢迎。 ⑨他们是在山上当头目。 ⇒他们当头目是在山上。 他是冲着我发脾气。 ⇒他发脾气是冲着我。
--	--

〈表 1-1: 李临定 1986 “是” の文型分類〉

(李临定 1986 : 256-274 参照)

李临定(1986)は“是”の文法特徴は以下の三点があると述べている。

- 〈Ⅰ〉“是”の後ろが名詞性成分の文型と“是”の後ろが述語性成分の文型では、“是”の文法特徴の基本は同じである。
 (それは、「否定形が同じ」、「是不是」を用いて質問することが可能」、「是……,还是……」を用いて質問することが可能」、「是」の前には多様な副詞があることが可能(“大概”、“好像”、“一定”、“的确”)、「是」の前に助動詞があることが可能、「是」の前に前置詞句“在…”があることが可能」である。)
- 〈Ⅱ〉“是”は否定形が可能、“X不X”形式で質問することができるが、“是”の後ろの動詞もこのような形式がある。
- 〈Ⅲ〉文中の“是”は「弱化(ストレスがない)」と「強化(ストレスがある)」の違いが存在する(主に動詞文の中にある)。

1.1.3 张和友(2012)の記述

张和友(2012)は、“是”構文を典型的“是”構文、准典型的“是”構文と非典型的“是”構文に分けた。

〈Ⅰ〉典型的“是”構文

文法形式は“VP1—是—NP2”であり、意味形式は“実体/名物—断定—実体/名

物”である。また、この時の“是”の意味特徴は“典型的断定”である。さらに、この文法と意味の間は同構(対応)となることができる。

〈Ⅱ〉准典型的“是”構文

文法形式は“VP(節Sを含む)/VP的—是—VP/NP/PP”であり、意味形式は“指称化した後の同等あるいは類属”である。また、“是”の意味特徴は“準断定”である。さらに、この場合の“是”構文の中に含まれる“動詞”成分は必ず“指称化”を経て典型的構造の意味形式の中に入ることができる。」(指称化するとき形態変化がない)と述べている。

〈Ⅲ〉非典型的“是”構文

文法形式は“話題—説明の標記”であり、意味形式は“メタファー、転喻あるいは叙述性間の同等あるいは類属”である。また、この時の“是”の特徴は“焦点化断定”であり、この場合の“是”構文の状況は複雑である。」と述べている。

(张和友2012:22)

ここでは、主に非典型的“是”構文について論じる。张和友(2012)は非典型的“是”構文には四つの構造があると述べ、それを以下のように示す。

〈Ⅲ1〉意味独特タイプ“是”構文

- | | |
|---------------------------|-------------------------------|
| (18) 这个男人是 <u>日本女人</u> 。 | (この男は日本女性です。) |
| (19) 小张是 <u>父亲病</u> 了。 | (張さんはお父さんが倒れた。) |
| (20) 这条裤子是 <u>晴雯的针线</u> 。 | (このズボン <u>は</u> 晴雯の縫物であったのだ。) |
| (21) 那场大火是 <u>电线走了电</u> 。 | (あの火災は電線が漏電した。) |
| (22) 我喝酒是 <u>自己的钱</u> 。 | (私はお酒飲むのは自分のお金だ。) |

(张和友2012:42)

张和友(2012)は、これら文の形式は「典型的“是”構文、准典型的“是”構文と同じであり、「NP/S是NP/S」で示すことができる」と述べる。

〈Ⅲ2〉焦点形式“是……的”構文

- | | |
|------------------------------------|--------------------|
| (23) 我是 <u>昨天进的城</u> 。 | (私は昨日町に行ったのだ。) |
| (24) 小王是 <u>第一个跳下去的</u> 。 | (王さんは一番目に跳び落りたのだ。) |
| (25) 王大夫是 <u>用中草药治好那个病人的关节炎的</u> 。 | |

(王先生は漢方薬を使い、あの患者さんの関節炎を治したのだ。)

(张和友2012:43)

张和友(2012)は、「形式から見ると(23)から(25)は『NP1是NP2』で表すことができ

る。この場合の“是”の後ろの成分を“的”字句構造と見なし、その機能は名詞性成分NPと同じであるが、言語直感では上述のことに反対する。なぜなら、これらの文の基本的意味は同等或いは類属ではないからである」と指摘している(张和友2012:43)。

张和友(2012)によると、発話者がある出来事に焦点としたい要素がある場合、焦点化の文法手段を採用することによって、ある成分を突出させる。このような焦点を「部分焦点」と主張している。また、この場合“是”の性質は「焦点標識」^(注2)である。意味は「同等或いは類属(同等或类属)」となることができる。例えば、(23)の文では、“我[話題]—是昨天进的城[動態属性の説明]”と理解することができる。

さらに、张和友(2012)は、「この類の焦点構造は二つタイプの属性を持つ」と述べる(张和友2012:49)。それは、「①「動態性」と「静態性」と②「上部断定性(高层断定性)」という属性を持つ」と指摘している(张和友2012:49)。

①の「動態性」と「静態性」という属性は、言語中の文が「動態過程」と「静態関係文」の二つに大きく分かれ、“是……的”構文は「動態」と「静態」という二種の属性を兼ねる文である。“是……的”構文は“是”が標識として、関連がある成分と一緒に結びつくとき一定の「動態性」を持つ。しかし、“是”が結びつけるのは二つの静態実体ではないので、その「静態性」は純粹ではない。“是”の作用は「動作者—行為動作」が対応している事件を静態化させて、これによって、文が一定の動態性を伴う。しかし、この種の動態性は本当の叙述文が持っている動態性に対しは弱く、「弱動態性」になる。

②の「上部断定性」という属性は、発話者の「断定」が「已然前提」に対してはより一層高い特徴であり、已然前提は「下部」で、発話者の「断定」は下部前提に対して生じたものであり、それはより一層高い特徴で、それは発話者の出来事内部のある要素に対する「感情移動」である。文頭NPが指すものは実際に発話者が議論している「話題」であり、後項の「弱動態性」の出来事は話題に対する説明である。

例えば、(23)の全体構造の意味は、“我进城”という已然の出来事で「時間“昨天”」のような特徴を持つことであり、(24)の全体構造の意味は、“小王跳下去”の已然の出来事では“第一个”のような特徴を持つ。さらに、(25)の全体構造の意味は、“王大夫治好那个病人的关节炎”この已然の出来事で“用中草药治”のような特徴を持つことであると分かる。

〈Ⅲ3〉確認型“是”構文

张和友(2012)は、「この類は、主語と述語の間に“是”があることによって、『主語—“是”—述語』構造を形成する」と述べる(张和友2012:43)。例を挙げると以下のとおりである。

(26) 他是去图书馆了。

(彼は図書館に行きました)

(27) [世乒赛] 王楠是输不起, 梅村礼是输不怕。

([世界卓球の試合] 王楠は負けられない、梅村礼は負けを恐れない。)

(张和友2012:43)

张和友(2012)は、「この構造の“是”は主語と述語の間にある。その作用は、陳述している「主語—述語」に対する断定である。さらに、このような機能を持つ“是”は文頭に置かれることもできる」と述べる(张和友2012:43)。次のような例を挙げている。

(28) 是我说错了, 不是你记错了 (私が間違って話した、君の記憶違いではない。)

It is the case that I give a wrong message not your memory is not correct.

(29) 问话：什么声音？ (質問：何の音なの？)

答语：是猫把花瓶打碎了。 (答え：猫が花瓶を打ち壊した)

想要表达的意思：那声音是猫把花瓶打碎了。 The cat broke the vase.

表現したい意味は：あの音は、猫が花瓶を打ち壊したです。

更为切贴的表达：It is the case that the cat broke the vase.

(张和友2012:44)

この場合“是”の機能は「全体焦点」であり、海外の文献の中でこの状況の焦点は「広い焦点(broad focus)」と呼ぶ。即ち、述語、或いは文が焦点となる。また、“是”構造は英語の‘It is the case that’ 或いは ‘It is true that’ と同じ意味を示す。この二者はどちらにおいても共に発話者が出来事の中のある種の要素に対して焦点を突出する手段である。

この類の構造の文法意味は〈統語上〉是—[主語(空になることが可能)—述語]、〈意味上〉断定：「行為主体—動作行為」である。

〈Ⅲ4〉断定意味空虚型“是”構文

张和友(2012)は、「この類では、連接成分(“X”で示す)の後に“是”が結び付くと“X是”構造になる。その後ろに“S”が結び付く。その中の“X”は接続詞でも、或いは、副詞であっても良い。」と述べる(张和友2012:45)。これに対応する例は以下のとおりである。

(30) 如果是我将来有一天得了个闲, 我一定游遍祖国的山山水水。

(もし、将来、ある日、暇ができれば、

私は絶対に祖国のいろいろな場所に遊びに行きます。)

If I have free time some day,...

更切近的表达：If it is the case that i have free time some day,...

(31) 我喜欢音乐, (我)尤其是喜欢古典音乐。

I like music, especially classic music.

(私は音楽が好き、特に古典音楽が大好きです。)

(张和友2012:45)

そして「この構造中の“是”と“是S”構造中の“是”の機能には違いが存在しない。共に発話者の語気(断定)である。二者の相違点は“是S”構造中で、“是”は“S”中の述語について言えば、高級述語であることによって、“S”が陳述する状況に対する断定である。従って、“是”を省略することができない。

さらに、断定意味空虚“X是”構造の中では、Xの作用域は“是S”である。“是”の作用域はその後ろのセンテンスSであり、構造は「X[是(S)]」である。ここから、“X”は全体の意味に制約作用を起こすと分かる。“是”は“S”だけに作用があり、“是S”と“S”共に“X”の作用域の中にある。この種の意味構造の中では“是”を省略することができる」と述べている(张和友2012:45)。

1.1.4 本論文の捉え方

本論文では、张和友(2012)と同様に、“是”は「焦点標識」であると考え、その機能は焦点を明示化することである。さらに、张和友(2012)によると、「発話者が述べている「断定」は「出来事」に対して発したものである」と指摘している。具体的には、発話者が「断定」する根底にある出来事(前提)が“是”によってマークされる成分に対応する属性特徴を持つということを「断定する」。すなわち、この種の構造の全体の意味(論理の意味)は「ある出来事が何らかの属性特徴を持つ」ことである。

(张和友2012:94)

例えば、(23)において“是”が焦点を明確化し、“昨天”が焦点成分(张和友(2012)が言うところの「部分焦点」)である。本論文では、“是”の直後の部分は「+排他性」・「+突出性」という二つの性質を持つ、焦点であると考え。(23)の“是”(「焦点」)の分析は次のように記述する。

(23) 我是昨天进的城。(私は昨日町に行ったのだ。) (张和友2012:43)(再掲)

(32) 有'([焦点], 昨天)

アル ソノ [焦点] ガ 〜デ^(注3)

また、本論文では、“是”構造は「已然の出来事」であるというわけではなく、「単純出来事」或いは「未然出来事」という意味も示す。その理由は、「単純時態」

を表す成分“着”、或いは「未然時態」を表す様相成分の“会”、“要”、“一定”などが共起するからである。

1.2 “的”に関する研究

“的”構文の研究は、これまで様々な議論が展開されてきた。しかし、各研究者の注目する角度によって、“的”の生起位置は、どのような意味役割を示しているのか、また“的”がどのような機能を持つかについて、一致した見解は得られていない。

马学良・史有为(1982)では「“的”は過去完成、過去実現を表す助詞であり、“テンスー時間助詞”と呼ぶべきである」と主張している(马学良・史有为 1982: 68)。李纳・安珊笛・张伯江(1998)は、表現の角度から始めると指摘がある。

“的”構文の構成について、朱德熙(1978)は、“的”字句構造は S1:「M+是+DJ 的」、S2:「DJ 的+是+M」、S3:「是+M+DJ 的」、S4:「是+DJ 的+M」、S5:「(DJ 的)1+是+(DJ 的)2」の五つの種類の判断文によって構成されると述べる。

そして、杉村博文(1998)は「V 的 O」は「V 了 O」の照応形式であると述べる。このような現象は“先 le 後 de”という性質を持つ、その理由は「V 的 O」は「V 了 O」から作り出したからであると捉えている。

木村英樹(2003)は「“的”字句の機能拡張である」と新たな観点を述べた。すなわち、“的”字句中の“的”とフレーズ中の“的”とは関係がある。前者は後者の機能拡張である。つまり、“的”字句の中の“的”字の動作区分機能は「構造助詞“的”が持っている出来事によって機能拡張を区分する」ことである(木村英樹 2003: 303)。

袁毓林(2003)は「V 了 O」形式の文を事件文と呼び、「V 的 O」形式の文を事態文呼んだ。さらに、杨凯荣(2016)は、文を「事件文」と「説明文」の二つに分け、事件文の文末形式は“了2”であると主張した。

ここでは、“的”構文について、「断定」の観点から論じた研究、及び“的”の移動における意味特徴の研究から、本論文が参考とした研究を取りあげる。

1.2.1 朱德熙(1978・1982)の記述

朱德熙(1978)は“的”構造と“是”判断文との関わりの中で以下の五つに区分して考察を行った。

- | | | |
|--|----------------------|----------------|
| S1: M+是+DJ 的 | 小王是昨天来的。 | (王さんは昨日来たのだ。) |
| S2: DJ 的+是+M | 昨天来的 <u>是</u> 小王。 | (昨日来たのは王さんだ。) |
| S3: 是+M+DJ 的 | 是我请小王来的。 | (私が王さんを招いたのだ。) |
| S4: 是+DJ 的+M | 是我开的门。 | (私がドアを開けたのだ。) |
| S5: (DJ 的) ₁ +是+(DJ 的) ₂ | 他拿 <u>的</u> 是人家挑剩下的。 | |

(彼が持っているのは他の人が選び残したものだ。)

表示式中の M は名詞成分を表わし、DJ は動詞性成分を表わす(単独の動詞、各種の動詞性構造および動詞が述語になる主述構造を含む)。

(朱徳熙 1978/1980:128)

さらに、朱徳熙(1982 : 140)は“的”構造が主語あるいは目的語として用いられた判断文について論じた。それは次の〈表 1-2〉で示した。

主語が“ <u>的</u> ”構造	他说的 <u>是</u> 上海话。 (彼が話すのは上海語だ。) 早上喝 <u>的</u> 是牛奶。 (朝飲んだのは牛乳だ。)
目的語が“ <u>的</u> ”構造	这杯水是凉 <u>的</u> 。 (この水は冷たいものだ。) 这本书是新买 <u>的</u> 。 (この本は新しく買ったのだ。)
主語・目的語 共に“ <u>的</u> ”構造	我看 <u>的</u> 是郭兰英演 <u>的</u> 。(私が見たのは郭蘭英が演じるものだ。) 他买 <u>的</u> 是人家挑剩 <u>的</u> 。(彼が買ったのは人さまが選んだ後に残ったものだ。)

〈表 1-2: 朱徳熙 1982 の“的”構造の分類〉

(朱徳熙著、杉村博文・木村英樹訳 1995 : 140 参照)

1.2.2 宋玉柱(1981)、马学良・史有为(1982)の記述

宋玉柱(1981)は以下の(33)と(34)の例を挙げている。(35)と(36)は马学良・史有为(1982)で挙げた例文である。

- (33) 你在哪儿学的蒸包子呀? (君はどこで肉まんの作り方を学んだのですか?)
(34) 他昨天晚上什么时候回来的? (彼は昨日の夜いつ帰ったのですか?)
(35) 你是哪儿上的车? (君はどこで車に乗ったのですか?)
(36) 你是哪儿上车的? (君はどこで車に乗ったのですか?)

宋玉柱(1981)は、(33)と(34)の例文の中で、「“的”は“来着”と同じようにどちらも動作が過去に発生したことを明示する時間助詞である」と主張している。

そして、(35)と(36)では、马学良・史有为(1982)は「この種の“的”は過去の完成、過去の実現を表す助詞であり、時態・時制助詞である。」と指摘している。

1.2.3 牛秀兰(1991)の記述

牛秀兰(1991)は、“是……的”構文の中の目的語の位置について分析を行った。それは、“是……的”構文の中で目的語の位置は二つの基本形式で示すことができると

主張している。例を挙げると、

a: 主語 + (是) + 状況語 + 動詞 + 的 + 目的語 (a 式)

例: 他 什么时候 受 的 伤? (《青春之歌》)

b: 主語 + (是) + 状況語 + 動詞 + 目的語 + 的 (b 式)

例: 你 (是) 在哪儿 看见 这些传单 的。 (《青春之歌》)

この二つ形式の相違点は“的”の位置である。それは、形式 a の中で、“的”は目的語の前にあり、形式 b 中で“的”は目的語の後ろにある。そして、共通点は動詞が表わしている動作は「すでに発生」、或いは「完了」を示し、強調するものは「状況語が表す動作の方式、時間、場所、条件、目的」などである。

さらに、牛秀兰(1991)は目的語の位置は任意に置くことなく、一定の規則がある。多様な要素の影響を受けると指摘している。

a 式の文は以下三つの場合において使うことが可能と述べ、それは

- 〈I〉 単音節動詞によって構成される場合。
- 〈II〉 動目式離合詞が現れる場合。
- 〈III〉 動詞は方向補語を伴い、また物事目的語を伴う場合。である。

b の形式は「主語 + (是) + 状況語 + 動詞 + 目的語 + “的”」において、以下二つの場合に使用する。それは、

- 〈I〉 動詞が二音節である場合。
- 〈II〉 動詞が結果補語を伴う場合。である。

1.2.4 李納・安珊笛・张伯江(1998)の記述

李納・安珊笛・张伯江(1998)は“的”は「確認の態度」を表し、「認識範疇」に属し、それは一個の命題に働きかけ、表すものは文に対する感情的態度のタイプであり、一種の感情的態度を表す助詞である。

さらに、この角度から考える有効性は、今までの各研究者が文末の“的”は構造助詞であるか、あるいは語気詞であるかという点で意見が異なっているので、“的”に対する十分な論理と根拠をもって“的”のシステム地位を説明できると考えるところにある。つまり、李納・安珊笛・张伯江(1998)は、“的”は確認を表す「語気助詞」で、例えば“吗”や“的”と同じであり、「構造助詞」ではないと述べる。(“的”は文末語気助詞であり、構造助詞ではない。)

1.2.5 袁毓林(2003)の記述

“是……的”構文について、袁毓林(2003)は「動詞性成分が述語の中心となる文を事件文(event sentences)と呼び、文末に“的”を有する文を事態文(state-of-affairs sentences)と呼ぶ。そして、事件文から事態文への派生過程について、二つの派生形式がある。」と述べた。

S10 : S+Ad+V+O		(事件文)
S20 : S+Ad+V+O+的	→S21 : 是+S+Ad+V+O+的	(事態文)
	→S22 : S+是+Ad+V+O+的	
S30 : S+Ad+V+的+O	→S31 : 是+S+Ad+V+的+O	(事態文)
	→S32 : S+是+Ad+V+的+O	
S40 : O+S+Ad+V+的	→S41 : O+是+S+Ad+V+的	(事態文)

袁毓林(2003)は、事態文においては、“是”の置かれる位置によって構造方式が異なる。そこで、意味が変わり、強調したいものも変わると指摘している。それは、“S10”は事件文であり、“S20”から“S40”までは事態文である。しかし、構造が違う。“S10”の場合には動詞の後ろに“了”があることによりイベントを示す。そして、“S20”では、文末に“的”があることにより自己指示の意味を示す。さらに、事件を素材に話し手の判断を加えることができ、判断文にもなることができる。

次に、“S30”の場合には、動詞の後ろに“的”があることにより「完了」の意も示す。すなわち、すでに完成していることである。最後に、“S40”の場合には、文末に“的”があることにより目的語を文頭に置くことになる。

従って、“S10”から“S20”、“S10”から“S30”、“S10”から“S40”になることができる。しかし、“S10”から“S40”に一度にはならないので、“S30”まで行き、“S30”の目的語が前に移動することにより“S40”になる。

また、上の転換例から、事件文に対し、事態文は文末や動詞の直後の“了”を削除し、文末や動詞の直後に“的”をともらうことが必要であると分かり、“S21”、“S22”、“S31”、“S32”、“S41”、“S42”という形式の中で、“是”が生起する理由は焦点を明確に示すためであることが分かる。

1.2.6 楊凱榮(2016)の記述

楊凱榮(2016)は、“了”を使用するか否かが文の機能と関わり、文末に“了”を伴う文は「事件文」(出来事の発生)である。この場合“了”の文法形式は“了2”となり、文全

体は新情報であるを見なす。と述べる。また、文中に“(是)……的”を用いる文は「説明文」と呼ぶことにする。楊凱榮(2016)は主に「機能の角度」から「事件文」と「説明文」の相違と使用動機について分析した。

1.2.7 杉村博文(1999)の記述

杉村博文(1999)によれば、“的”字句は以下(A~E)の意味特徴と文法機能を持つ、「Vde(O)」の「照応形」である。

- (A) “的”構文は必ず已然の時態を表す。
- (B) 「Vde(O)」は否定の修飾を受け入れない。
すなわち、「*S 没 Vde(O)」は成立しない。
- (C) “的”構文の「V」はアスペクト接尾辞を伴わない。
- (D) “的”構文の「V」は一般的に様態描写的な連用修飾語の修飾を受けない。
- (E) 「Vde(O)」の「O」は不定目的語であってはならない。

(A)から(E)の諸現象に対しては、照応形式という解釈は一定の説明力を有する。しかし、多くの言語現象では照応規則の角度から有効な解釈をすることができない現象も存在する。それは以下の(F)から(H)の規則になる。

- (F) “的”構文は動量詞や〈回数〉表現を目的語にとることができない。

- (37) 甲：“我以前去过太原。” (甲：“私は以前太原に行ったことがある。”)
乙：* “去的几次？” (乙：“何回行ったのだ？”)
甲：* “去的三次。” (甲：“三回に行った。”)

- (G) “的”構文は一般的に〈原因〉を表す句や節を構成することが難しい。

- (38) 甲：“？/*他为什么迟到的？”
乙：“？/*因为遇到汽车事故迟到的。”
（“？/*彼はどのようにして遅刻したのだ？”
（“？/*なぜならバス事故にぶつかったので遅刻したのだ。”）

- (H) “的”構文は「疑問詞」を「目的語」にとることができる。

- (39) 甲：“你都要的什么菜？”
乙：“我要的醉蟹和红烧鱼翅。”

(甲：“君はどんな料理を注文したのですか？”)

(乙：“私はかにの紹興酒漬けとフカヒレ煮込みを注文したのです。)

上述のように、杉村博文(1999)は、“的”構文「SVde(O)」という構造は、已然の動作表現に照応する照応形式としてよりふさわしい構造を形づくるために、「VO 的」という構造から“的”が前方移動することによってできた構造であると記述する。さらに、「“的”の前方移動」は以下の三点を主張している。

- 〈Ⅰ〉すべての“的”構文は本来“是”を主要動詞とし、“的”の現れない“的”構文は“的”が省略される。
- 〈Ⅱ〉“的”構文の「SVde(O)」という構造を「S(是)VO 的」からの派生構造と仮定する。
- 〈Ⅲ〉「Vde(O)」の de を、名詞句を構成するための構造助詞“的”と見なし、「Vde(O)」全体を名詞句構造と見なす。

1.2.8 本論文の捉え方

本論文では、朱德熙(1961)が述べている“的”は構造助詞という捉え方を基に、分析する。しかし、“是……的”構文は「判断文」ではなく、「断定」の意味を示す文であると考ええる。

そして、李纳・安珊笛・张伯江(1998)の“的”は確認を表す「語気助詞」という捉え方に対し、本論文では、異なる立場から分析する。それは、語気助詞“的”は「様相」を表し、「様相」は「必然性」と「可能性」の意味を示すと考ええる。例えば、“吗”、“呢”、“吧”など疑問を示す語気詞は「必然性」と「可能性」の中に含まれる。場合によって、“的”と“吗”、“呢”、“吧”は同じ[様相]の機能を働かため、“的”は「語気助詞」であると考えられる。つまり、“的”は「構造助詞」だけではなく、「語気助詞」であることも可能と考える。

一方、宋玉柱(1981)と马学良・史有为(1982)の捉え方に対し、本論文では彼らの考え方とは異なる意見を述べる。それは「様相論理」の角度からの再考察である。

まず、(33)と(34)の例文は「過去」しか使えない文である。しかし、動作がすでに「過去」で発生した、あるいは、「過去」に発生したといった記述はより厳密にさせるべきである。そして、“来着”は「近い経験」であり、「過去」ではないが、すでに近い最近で発生したことと考えることができる。さらに、龚千炎(1995)の文献を参考することによって、史有为・马学良の述べる「過去」時点は実は「参照時間点」であり、参照時間点の前に現れたことは「已然」と見なすことができると考えられる。

さらに、(35)と(36)の文において、動詞の後ろの“的”と文末の“的”は「已然」の意味の保持体であると考えられる。「過去」というのは発話時点を用いない限り生まれ

ない。史有为が「過去」というのは実際には「已然」と言い変えるべきである。従って、「已然」は「過去」と言えない。そのため、马学良・史有为(1982)の「過去」というのは出来事が「参照時間点以前」と考える。

最後に、“的”の構造について、本論文では、袁毓林(2003)が“是……的”構文について「先に“的”の成立について記述し、その後“是”の派生について記述した」ことと同様に、「先に“的”後は“是”」の観点から分析する。ここでは“是……的”構文は四つの過程を経て成立すると考える。それは、「格役割演算」、「時間点演算」、「様相演算」と「焦点演算」である。

1.3 研究方法

本論文は現代中国語の“是……的”構文の意味とその論理を論理式によって明らかにすることを大きな目的のひとつとしている。このため研究方法として、形式意味論の基礎として導入される、「命題論理」、「述語論理」および「可能世界」といった枠組みを中心的要素として採用する。

1.3.1 命題論理

文は「命題」を表し、「命題論理」(propositional logic)はその命題と命題間の関係を取り扱う。命題と命題を結びつける要素を結合子と呼び、結合子により複合命題を形成する。二つの命題を結びつける結合子には連言「&」、選言「V」、含意「 \rightarrow 」、同値「 \Rightarrow 」がある。このほか二つの命題を結びつける働きはないがよく用いられるものとして一つの命題に働く(基本命題とは限らない、複数結びついた命題全体に働く場合もある)否定「 \neg 」がある。

これらの結合子はそれぞれ真理条件が異なる。たとえば連言結合子「&」を用いて作られる命題を一般化すると次の(40)となる。

(40) $p \& q$

(杉本孝司 1998 : 71)

一般的にこの形式を持つ命題に対してその意味解釈は(=真理条件)が例えば、(41)のように与えられる。

(41) 命題 $p \& q$ は命題 p , q が同時に真であれば真であり、それ以外は偽となる。

(杉本孝司 1998 : 72)

この真理条件は、次の〈表 1-3〉のような真理値表で示することができる。この真理値表中の“1”は「真」を表し、“0”は「偽」を表す。

p	q	p&q
1	1	1
1	0	0
0	1	0
0	0	0

(杉本孝司 1998 : 73)

〈表 1-3: 連言「&」の真理値表〉

「連言」(&)の他、「選言」(∨)、「含意」(→)、「否定」(∼)それぞれの真理条件は次の(42)-(44)を示すと次のようである。

(42) 選言∨の真理条件

命題 $p \vee q$ は命題 p , q が同時に偽であれば偽、それ以外は真となる。

(杉本孝司 1998 : 74)

(43) 含意→の真理条件

命題 $p \rightarrow q$ は命題 p が偽であるか命題 q が真の時真、それ以外は偽となる。

(杉本孝司 1998 : 75)

(44) 否定∼p 真理条件

命題 $\sim p$ は命題 p が偽の時、真、それ以外は偽となる。

(杉本孝司 1998 : 75)

1.3.2 述語論理

「述語論理」(predicate logic)は文の中身であり、すなわち命題の内部構造を扱う言語である。

(45) John walks.

(杉本孝司 1998 : 113)

(45)の文は述語論理では、次のように示す。

(46) walk' (j)

基本的には命題を、述語(predicate)とその述語が満たされることを要求している項(argument)の組み合わせとして表現する言語である。「述語が満たされることを要求している項」の数は述語により異なるので、それぞれ、必要とする項の数に従って、「一

項述語」、「二項述語」、「三項述語」と呼ばれ、例を示すと以下のようになる。

(47)a. 「一項述語」: run, walk, dance, etc.

b. 「二項述語」: love, kiss, hit, break, etc.

c. 「三項述語」: give, send, introduce, etc

(杉本孝司 1998 : 113)

1.3.3 命題と可能世界

真理値表では、 p の値として “1” または “0” のみが、同様に q の値として “1” また “0” のみが付与されている。しかし、仮に p という命題しか持たないのであれば、つまり p という命題の意味しか理解していないのであれば、世界は p が成立しているか、成立しないか、のどちらかとして理解されることになる。より厳密には「 p と q の真理値の組み合わせが、 p と q が表す状況のあり方によって決まる可能な世界を規定している」とすべきと指摘した。そこで、真理値表は次の〈表 1-4〉になる。

	p	q	$p \& q$
w1	1	1	1
w2	1	0	0
w3	0	1	0
w4	0	0	0

(杉本孝司 1998 : 87)

〈表 1-4: 可能世界真理値表〉

w1 から w4 は可能世界、このように論理的に可能な世界を可能世界(possible world)で表し、w1 は命題 p と q が成立する世界、w2 は命題 p のみが成立し q は成立しない世界などとする。すると p という命題は意味論的には次のように理解できる。

(48) 命題は可能世界の集合である。

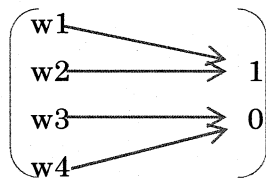
(杉本孝司 1998 : 88)

この定義を基に、可能世界の真理値の中で、 p の意味は {w1, w2}、 q の意味は {w1, w3} である。そして、(48)で命題とは可能世界の集合であるとしたが、これは次のようにも考えることができる。

(49) 命題とは個々の可能世界に関して、真が偽かを与えてくれる関数(function)である。

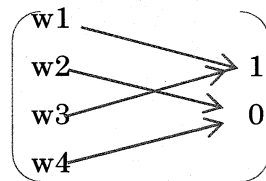
(杉本孝司 1998 : 88)

このことから、命題 p は $w1$ に対しては値 1 を、 $w2$ に対しては値 1 を、 $w3$ に対しては値 “0” を、 $w4$ に対しては値 “0” を、それぞれを与えてくれる一種の関数である。同様に q も同じである。要するに、命題とは可能世界の集合である、その集合のそれぞれの要素に対して “1” から “0” (或いは真か偽) を与える関数として命題を解釈することである。そこで、命題 p , q , $p \& q$ をそれぞれ、次の〈図 1-1〉〈図 1-2〉〈図 1-3〉ような関数であると規定することもできる。



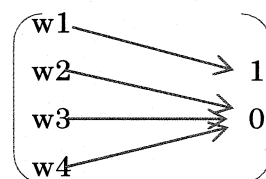
(杉本孝司 1999 : 89)

〈図 1-1: 命題 p の可能世界から真理値への関数〉



(杉本孝司 1999 : 89)

〈図 1-2: 命題 q の可能世界から真理値への関数〉



(杉本孝司 1999 : 89)

〈図 1-3: 命題 $p \& q$ の可能世界から真理値への関数〉

上の〈図 1-1〉から、命題 p において、 $w1$ の値は “1” (真)、 $w2$ の値は “1” (真)、 $w3$ の値は “0” (偽)、 $w4$ の値は “0” (偽) である。〈図 1-2〉では、命題 q において、 $w1$ の値は “1” (真)、 $w2$ の値は “0” (偽)、 $w3$ の値は “1” (真)、 $w4$ の値は “0” (偽) である。さらに〈図 1-3〉命題 $p \& q$ の関数を見ると、 $w1$ の値のみ “1” (真) で、ほかの $w2$, $w3$, $w4$ の値は “0” (偽) である。つまり、次のような「計算結果」を得る。

$$(50) [p \& q] (w1) = 1$$

$$[p \& q] (w2) = 0$$

$$[p \& q] (w3) = 0$$

$$[p \& q] (w4) = 0$$

(杉本孝司 1998 : 89)

ここから、命題 $p \& q$ では、 $w1$ という世界はその命題の内容に対応した世界だ(つまり、 $w1$ では命題 $p \& q$ は真だし)、 $w2$ はそうではない、等と判断できる。従って、次のように定義し特徴づけていることになる。

(51) 命題は可能世界から真理値への関数である。

(杉本孝司 1998 : 90)

1.3.4 本論文における論理式

本論文では、命題論理と述語論理を用いて“是……的”構文を記述し、“是……的”構文がどのようなものなのかを明示する。そこで、“是……的”構文は次のような三項関数として捉えられる。

$$(52) \text{是}' (\alpha, \beta, \gamma)$$

この式の中で α と β は個体であり、 γ は式である。例えば、“我早晚是要找她算账的”という文は次のような論理式で表すことができる

是' [我, 她, 找' (我, 她) & 到' {找' (我, 她), 算' (我, 账)}]

α β

γ

& 有' {算' (我, 账), 早晚} & 有' [有' {算' (我, 账), 早晚}, 的]

この論理式は、「“我”と“她”という個体が存在し、“我找她算账”という未然の出来事はいずれかある」を断定する。「私」、「彼女」、「私が彼女を探しに行く」の間に「～ガ、～二、～二ケリヲツケル」ことを断定するという関係があることを示している。

1.4 本章のまとめ

本章では、“是……的”構文の先行研究と分析法についての研究を取りあげた。

“是”の意味機能は張和友(2012)の研究を概観し、本論文の考え方を述べた。“的”構文は朱德熙(1978)、袁毓林(2003)と張和友(2012)の分析を参考としたが、本論文では、“的”構文の“的”は「構造助詞」であり、「断定」、「様相」という意味を示す構

造であるとした。さらに、本論文の分析方法である形式意味論の方法について述べ、
“是……的”構文の基本的な構造を示した。さらに、本論文では、一般的な述語論理
に意味役割、焦点、時態の概念を導入し、当構文の意味構造がより明白にことを示し
た。

第2章 “是……的”構文の演算成立過程と論理分析

2.0 はじめに

本章では“是……的”構文の演算成立過程について述べる。現代中国語において、“是……的”構文はこれまで多くの研究者によって論じられてきたが、ここでは張和友(2012)の“是”構文を「典型的“是”構文^(注4)、准典型的“是”構文^(注5)と非典型的“是”構文^(注6)に分けた。」という見解を基に、ここで主に非典型的“是”構文について論じる。理由は張和友(2012)の見解は他の研究者とは異なり、「断定」の意味、及び“聚焦式“是……的”結構(焦点形式“是……的”構造)”に着目し、分析を展開しているため、注目する価値があり、これが「構造形式」及び「意味役割」と関わりからである。

また、袁毓林(2003)が“是……的”構文について「先に“的”の成立について記述し、その後“是”の派生について記述した」と指摘したことと同様に、「先に“的”後は“是”」の観点から分析してゆきたい。

袁毓林(2003)は、“是……的”構文について、「動詞性成分が述語の中心となる文を事件文(event sentences)と呼び、文末に“的”を有する文を事態文(state-of-affairs sentences)と呼ぶ。そして、事件文から事態文への派生過程について、二つの派生形式がある」と述べた。ここでは、袁毓林(2003)のこの捉え方を参考に、さらに張和友(2012)が述べている“是”は「焦点標識」という捉え方、及び「断定」という観点も導入し、より詳しく“是……的”構文の成立過程について分析する。そこで、二者の観点を総合して、“是……的”構文は以下の四つの過程を経て成立すると考える。

2.1 各成立過程の理論的背景

2.1.1 第一過程「格役割演算」

第一過程の「格役割演算」は「格」の演算である。ここで論じる「格役割」は主にフィルモアの「格文法」に関する論考を基づいて、本論“是……的”構文における「第一過程」の「役割演算」を提示し、論理式を用いて分析する。

〈格役割とは何か〉

フィルモアの格文法理論では、チョムスキーらの初期の変形文法理論に対する修正案として出されたものであるが、統語論を中心とする文法理論に対し、意味論と統語論に関係づけ新たな文法論の方向を示したと位置付けられる。さらに、フィルモア(1975)は、「格」の意味役割について以下のように述べる。

- ・動作主格(agentive)は「ある動作を引き起こす者の役割」である。
- ・経験者格(experiencer)は、「ある真理事象を体験する者の役割」である。
- ・道具格(instrumental)は、「ある出来事の直接の原因、あるいは心理事象と

関係して反応を起こさせる刺激となる役割」である。

- ・対象格(objective)は、「移動する対象物や変化する対象物。或いは、判断、想像における心理事象の内容を表す役割」である。
- ・源泉格(source)は、「対象物の移動における起点、及び状態変化と形状変化における最初の状態や形状を表す役割」である。
- ・目標格(goal)は、「対象物の移動における終点、及び状態変化や形状変化における最終的な状態、結果を表す役割」である。
- ・場所格(locative)は、「出来事が起こる場所及び位置を表す役割」である。
- ・時間格(time)は、「ある出来事が起こる時間を表す役割」である。

(J. フィルモア著, 田中春美・船城道雄訳 1975)

上述のフィルモアの格理論では、文は深層構造において一つの動詞と一つ以上の名詞句が特定の格関係を構成し、表層構造はこの深層構造から写像されると考えられている。

2.1.2 第二過程「時間点演算」

第二過程の「時間点演算」は龔千炎(1995)が提起した時間体系の観点に基づいて述べる。龔千炎(1995)が著した《汉语的时相时制时态》は「中国語の時間体系は“文の時制構造”、“文の時相構造”、“文の時態構造”によって構成される」とする。

“時相構造”については、龔千炎(1995)は「文の純命題意味に内在する時間特徴を表し、主に述語動詞の語彙意味により決まる。他の文成分の語彙意味も一定の制約作用を持つ。従って、文の時間特徴は動詞の時制と一致することもあり、一致しないこともある。」と述べ、時制構造については「事件発生の時間を示すことであり、時制は“過去”、“現在”、“未来”である」と述べ、さらに、文の時態構造は「事件がある段階にある特定の状態を指すことであり、時態は“已然”と“未然”である」と述べる。この観点を参考にしながら、第二過程の「時間点演算」について説明する。

2.1.3 第三過程「様相演算」

第三過程の「様相演算」については“的”は様相を表し、様相は「可能性」、「必然性」の意味を示す。さらに、文中に“的”を挿入することにより「断定」の意味となり、そのことにより「格役割」が消失する。すなわち、“了”が“的”に変わるとき「格役割」の演算が終了するということを述べる。

2.1.4 第四過程「焦点演算」

第四過程の「焦点演算」については断定することで焦点が生じ、断定後に焦点の位置が変わる。焦点は、文の中で最も重要な情報であり、焦点化された成分は新情報だ

けでなく、旧情報も含む。その中でも最も重要な情報は、一定の文法手段で表すことができる。ここでは徐烈炯、刘丹青(2003)の理論に従い、「焦点は“是”の直後の部分」であると考ええる。

以上、各過程の演算については「文中に用いた時に適当であるか」ということを規準にして、新たな角度から“是……的”構文の成立過程について深く検討したい。そして、ここで取り上げる“是……的”構文は袁毓林(2003)の「事態文」という捉え方を参照の上に、本論では、異なる立場から再検討する。

袁毓林(2003)が形式の角度から「事件文(動詞性成分が述語の核心になる文である。)」と「事態文(事件文に対し、事態文は文末や動詞の直後の“了”を削除し、文末や動詞の直後に“的”をとみなうことが必要である。)」という捉え方に対し、本論では、記述内容の角度から分析を行うことにする。それは、出来事をありのままに記述したのは「事件文」である。「事件文」に対し、断定の意味を加えるのは「事態文」である。つまり、「事件文」は“了”を含む文であり、「事態文」は“的”を含む文であると考ええる。さらに、この場合の「事態文」は「焦点化“是……的”構文」として考えられる。

ここでは、形式意味論の手法を用い、成立過程について明らかにする。また、それぞれの演算の間は「どのような関係によって結び付くか」についても究明したい。

2.2 焦点化“是……的”構文の成立過程

次に三つの焦点化構文“是……的”構文(「事態文」)の例を挙げ、その成立過程について説明する。

(53) 我是昨天进的城。

(私は昨日で町に行ったのだ。)

(54) 小王是第一个跳下去的。

(王さんは一人目で跳び落ちたのだ。)

(55) 王大夫是用中草药治好那个病人的关节炎的。

(王先生は漢方薬を使い、あの患者さんの関節炎を治したのだ。)

以上の各例において、文がどのような順序によって構成されるかが重要である

2.2.1 第一過程「格役割演算」の論理式による分析

(53)の「事態文」に対応する「事件文」は(53a)の“我进了城”であり、「格役割成分」を有する文である。この場合の“我”は「動作主格」であり、“城”は「着点格」である。さらに、“了”がある時点においては「格役割」の演算は終了せず、まだ存在していると考えられる。

(53)a. 我进了城

同様に、(54)の「事態文」に対応する「事件文」は(54a)の“小王跳下去了”であり、「格役割成分」を持つ文である。さらに、この場合の“小王”は「動作主格」である。すなわち、“了”がある時点においては「格役割」はまだ存在していると考ええる。

(54)a. 小王跳下去了

最後に、(55)の「事態文」に対応する「事件文」は、(55a)の“王大夫用中草药治好关节炎了”であり、「格役割成分」が存在する文である。この場合の“王大夫”は「動作主格」であり、“病人的关节炎”は「対象格」である。この文の中で「格役割」はまだ存在していると考ええる。

(55)a. 王大夫用中草药治好关节炎了

ここで、(53a)の“我进了城”という「事件文」を、第一過程「格役割演算」を論理式で示すと次の(53a')のようになる。

行ク ～ガ ～二 シタ ～コトガ [発生] ヲ
(53)a'. 进'(我, 城) & 有' { 进'(我, 城), 了 }

この論理式は「私が町に行く、かつ、私が町に行くことが[発生]をした」と読む。

次に、(54a)の“小王跳下去了”という「事件文」を、第一過程「格役割演算」を論理式で示すと次の(54a')のようになる。

跳ブ ～ガ イタル ～ガ ～二 シタ ～コトガ [完了] ヲ
(54)a'. 跳'(小王) & 到' { 跳'(小王), 下去'(小王) } & 有' { 下去'(小王), 了 }

この論理式は「王さんが跳ぶ、かつ、王さんが跳ぶことが、落ちることにいたる、かつ、王さんが落ちることが[完了]した」と読む。最後に、(55a)の“王大夫用中草药治好关节炎了”の例の論理式は次の(55a')である。

～ハ ～デ 治シテ ～ガ ～ヲ
 (55)a'. 用'〔王大夫, 中草药, 治'(王大夫, 关节炎)

良クナル ～ガ シタ ～コトガ [発生]ヲ
 &好'(关节炎)&有' {好'(关节炎), 了} }

この論理式は「王先生は、漢方薬で、王先生が関節炎を治して、かつ、関節炎が良くなる、かつ、関節炎が良くなる事が[発生]した」と読む。

以上のことから、この段階では「格役割演算」を用いてそれぞれの格の役割について説明することは妥当であると考ええる。

2.2.2 第二過程「時間点演算」の論理式による分析

(53a)の“我进了城”という文では、“了”を加えると「時態」を決めることができ、時態が決まると参照時間点も決められる。さらに、文中の“了”が「出来事時間点(ET)」の“进城”を指す。ここで「参照時間点(RT)」を決めなければならない。この文の中で“昨日”と“町に行きました”は同時に発生しているので、この場合の「参照時間点(RT)」と「出来事時間点(ET)」は同じ時点にある。また、“昨天(「参照時間点(RT)」)”は「発話時間点(ST)」より前にあるので「時制」が決まる、“昨天”は過去にあるので、ここで時間点の演算が終わったと考えられる。

次に、(54a)の“小王跳下去了”という「事件文」では、「参照時間点(RT)」の意を示す“第一个”を加えると「時態」を決めることができ、時態が決まると「参照時間点(RT)」も決められる。“跳下去”は「出来事時間点(ET)」である。この場合の(54a)と(53a)と同様に、“了”は「出来事時間点(ET)」である。

しかし、この文の中で“第一个”と“跳下去”の発生時点は一致する場合もあり、「参照時間点(RT)」より先行することもある。また、“第一个(「参照時間点(RT)」)”は「発話時間点(ST)」より前にあることで「時制」が決まり、時間点の演算が終わったと考えられる。同様に、(55a)の“王大夫用中草药治好关节炎了”という文では(53a)と(54a)と同じように考えることができる。

ここでは、(53a)の文における第二過程「時間点演算」を分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、[時間点]の“昨天”を加えると、次の(53b)になる。

(53)b. 我昨天进城了

これを論理式で示したものが(53b')である。

アル ～ガ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ アル ～ガ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ トル ～ガ ～ヲ
 (53)b'. 有'(了, ET)&<'(ET, RT)&='(RT, 昨天)&<'(昨天, ST)&有'(ST, 的)

この論理式は「出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が昨日である、かつ、昨日が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる」と読む。

次に、(54a)の文における第二過程「時間点演算」を分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、[時間点]の“第一个”を加えると、次の(54b)になる。

(54)b. 小王第一个跳下去了

これを論理式で示したものが(54b')である。

アル ～ガ ～デ 同じカ先行スル～ガ ～ニ アル～ガ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ トル ～ガ ～ヲ
 (54)b'. 有'(了, ET)&≦'(ET, RT)& 有'(RT, 第一个)&<'(第一个, ST)&有'(ST, 的)

この論理式は「“了”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)と一致する、あるいは先行する、かつ、参照時間点(RT)が“第一个”である、かつ、“第一个”が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる」と読む。

最後に(55a)の文における第二過程「時間点演算」を分析する。この段階では、第一過程「格役割演算」を基に、[時間点]の“空”を加えると、次の(55b)になる。

(55)b. 王大夫用中草药治好关节炎了

これを論理式で示したものが(55b')である。

アル ～ガ ～デ 先行スルアルイハ一致スル 先行スル ～ガ ～ニ
 (55)b'. 有'(了, ET) &≦'(ET, RT) & <'(RT, ST) &有'(ST, 的)
 トル ～ガ ～ヲ

この論理式は「“了”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点は参照時間点と一致する或いは先行する、かつ、参照時間点(RT)は発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる」と読む。

以上のことから、この段階では「時間点演算」を用いて時間軸における各時間点について説明することは妥当であると考えられる。

について説明することは妥当であると考え。

2.2.3 第三過程「様相演算」の論理式による分析

この段階では、第二過程「時間点演算」を基に、断定([様相])を表す成分“的”を加えることである。まず、(53b)の“我昨天进了城”という「事件文」に“的”を挿入すると(53c)の“我昨天进的城”という「事態文」になる。“的”を挿入することにより格役割が消失し、断定(様相)の意味を追加することとなる。

そして、(54b)の“小王第一个跳下去了”という「事件文」に“的”を挿入すると(54c)の“小王第一个跳下去的”という「事態文」になる。“的”を挿入することにより格役割が消失し、断定([様相])の意味を追加することになる。

同様に、(55b)の“王大夫用中草药治好关节炎了”という「事件文」に“的”を挿入すると(55c)の“王大夫用中草药治好关节炎的”という「事態文」になる。さらに(53c)から(55c)の“的”は様相という論理形式の集合である。

ここで、第三過程「様相演算」を論理式で示すと次のようになる。(53c) から(55c) の例の論理式は次の(53c'), (54c'), (55c')である。

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(53)c'. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相] , 断定)

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(54)c'. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相] , 断定)

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(55)c'. 有' (的, [様相]) & 有' ([様相] , 断定)

エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ

この三つの論理式は共に「“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ」と読む。

ここで用いている「論理形式」とは『論理哲学論考』(ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳)における定義に基づくものである。論理形式は「ある対象の論理形式とはその対象がどのような事態のうちに現れるか、その論理的可能性の形式のことである。」と説明されている(ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳2003: 184)。

以上、この段階では「様相演算」を用い、“的”が「断定([様相])」を表すことを説明した。

2.2.4 第四過程「焦点演算」の論理式による分析

この段階では、第三過程「様相演算」を基に、「焦点標識」の“是”を加えることである。(断定すると「焦点」が決めることが可能)

まず、(53c)の“我昨天进的城”という「事態文」に「焦点標識」の“是”を加えると、次の(53d)となる。

(53)d. 我是昨天进的城

これを論理式で示したものが(53d')である。

トル ~ガ ~トイウ論理形式の集合ヲ

(53)d'. 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 昨天)

アル ソノ [焦点] ガ ~デ

この論理式は「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“昨日”である。」と読む。(53d')の文では、“是”を加えることによって、「焦点」は“是”の直後にある“昨天”である。

次に、(54c)の“小王第一个跳下去的”という「事態文」に「焦点標識」の“是”を加えると、次の(54d)となる。

(54)d. 小王是第一个跳下去的

これを論理式で示したものが(54d')である。

トル ~ガ ~トイウ論理形式の集合ヲ

(54)d'. 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 第一个)

アル ソノ [焦点] ガ ~デ

この論理式は「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“第一个”である。」と読む。(54d')の文では、“是”を加えることによって、「焦点」は“是”の直後にある“第一个”である。

最後に、(55c)の“王大夫用中草药治好关节炎的”という「事態文」に「焦点標識」の“是”を加えると、次の(55d)となる。

(55)d. 王大夫是用中草药治好关节炎的

これを論理式で示したものが(55d')である。

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ

(55)d'. 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点], 用中草药)

アル ソノ [焦点] ガ ～デ

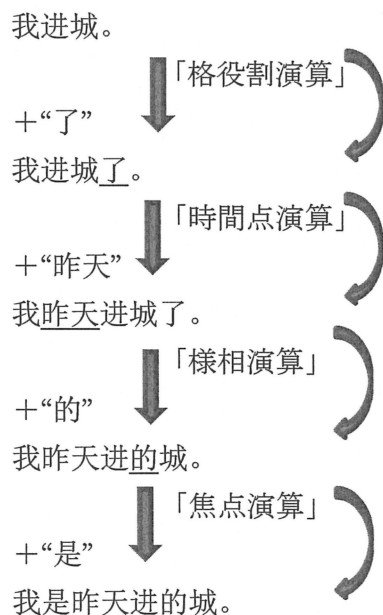
この論理式は「断定が〔焦点〕という論理形式の集合をとる、かつ、その〔焦点〕が“用中草药”である。」と読む。(55d')の文では、“是”を加えることによって、「焦点」は“是”の直後にある“用中草药”である。

以上、この段階では「焦点演算」を用い、「断定」が「焦点」を定めることができる。さらに、「焦点標識」の“是”を加えることによって、「狭い焦点」^②が明確化になることを説明した。

2.2.5 各演算の成立過程

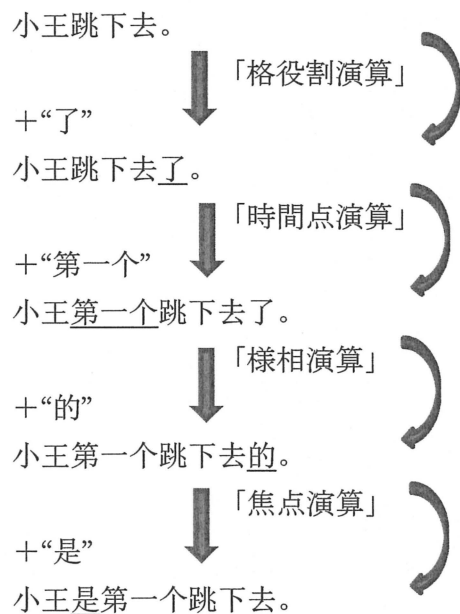
以上の各例の成立過程を簡単に図で示すと以下の通りである。

まず、(53)の“我是昨天进的城。”を考察対象すると、その成立過程は以下の〈図2-1〉のようになる。



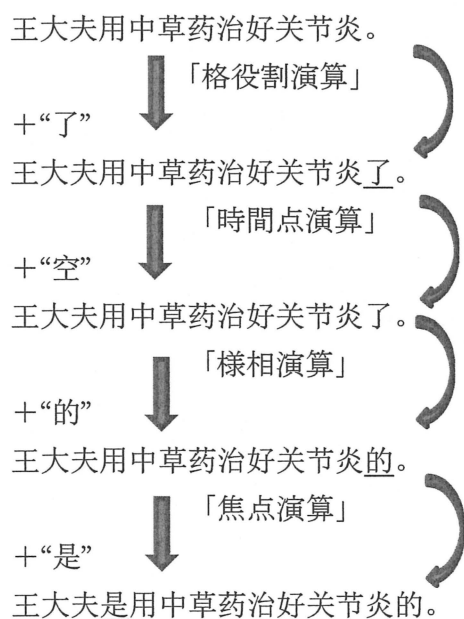
〈図2-1：“我是昨天进的城。”の成立過程図〉

(54)の“小王是第一个跳下去的。”を考察対象とすると、その成立過程は以下の〈図2-2〉のようになる。



〈図2-2：“小王是第一个跳下去。”の成立過程図〉

最後に、(55)の“王大夫是用中草药治好关节炎的。”を考察対象とすると、その成立過程は以下の〈図2-3〉のようになる。



〈図2-3：“王大夫是用中草药治好关节炎的。”の成立過程図〉

これまでに述べた“是……的”構文の成立過程を基に、(53)から(55)の全体の論理式を示すと次の(53')から(55')のようになる。

2.3.1 “我是昨天进的城。”の論理式

行ク ～ガ ～ニ シタ ～コトガ [発生] ヲ
(53)' 进'(我, 城) &有' {进'(我, 城), 了}
「格役割演算」

アル ～ガ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ アル ～ガ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ トル ～ガ ～ヲ
&有' (了, ET) &<' (ET, RT) &=' (RT, 昨天) &<' (昨天, ST) &有' (ST, 的)
「時間点演算」

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
&有' (的, [様相]) &有' ([様相], 断定)
エラブ ソノ集合ガ 要素[断定]ヲ
「様相演算」

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
&有' (断定, [焦点]) &有' ([焦点], 昨天)
アル ソノ[焦点]ガ ～デ
「焦点演算」

この論理式は「私が町に行く、かつ、私が町に行くことが[発生]をした、かつ、“了”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が昨日である、かつ、昨日が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる、かつ、“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ、かつ、断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“昨日”である。」と読む。

この論理式は四つの演算過程によって構成される。まず、「私が町に行く、かつ、私が町に行くことが[完了]をした」という部分は「格役割演算」を表す式である。

次に、「“了”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に先行する、かつ、参照時間点(RT)が昨日である、かつ、昨日が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる」という部分は「時間点演算」を表す式である。

さらに、「“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断

定]を選ぶ」という部分は「様相演算」が表示される。最後に「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“昨日”である」という部分は「焦点演算」を示す式である。

2.3.2 “小王是第一个跳下去的。”の論理式

跳ブ ～ガ イタル ～ガ ～二 スル ～コトガ [完了] ヲ
 (54) 跳' (小王) & 到' {跳' (小王), 下去' (小王) & 有' {下去' (小王), 了}
 「格役割演算」

アル ～ガ ～デ 同じカ先行スル～ガ ～二 アル ～ガ ～デ 先行スル ～ガ ～二 トル ～ガ ～ヲ
 & 有' (了, ET) & ≦' (ET, RT) & 有' (RT, 第一个) & <' (第一个, ST) & 有' (ST, 的)
 「時間点演算」

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 & 有' (的, [様相]) & 有' ([様相] , 断定)
 エラブ ソノ集合ガ 要素 [断定] ヲ
 「様相演算」

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
 & 有' (断定, [焦点]) & 有' ([焦点] , 第一个)
 アル ソノ[焦点]ガ ～デ
 「焦点演算」

この論理式は「王さんが跳ぶ、かつ、王さんが跳ぶことが、落ちることにいたる、かつ、王さんが落ちてしまうことが[完了]した、かつ、“了”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)と一致する、あるいは先行する、かつ、参照時間点(RT)が“第一个”である、かつ、“第一个”が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる、かつ、“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ、かつ、断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“第一个”である。」と読む。

また、この論理式は四つの演算過程によって構成される。まず、「王さんが跳ぶ、かつ、王さんが跳ぶことが、落ちることにいたる、かつ、王さんが落ちてしまうことが[完了]した」という部分は「格役割演算」を表す式である。

次に、「“了”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点(ET)が参照時間点(RT)に同じ、あるいは先行する、かつ、参照時間点(RT)が“第一个”である、かつ、“第一个”が発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる」という部分は「時間点演算」を表す式である。

さらに、「“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ」という部分は「様相演算」を表す式である。最後に、「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“第一个”である。」という部分は「焦点演算」を表す式である。

2.3.3 “王大夫是用中草药治好关节炎的。”の論理式

(55)'

～ハ ～デ 治サシテ ～ガ ～ヲ 良クナル ～ガ シタ ～コトガ [発生]ヲ
用'〔王大夫，中草药，治'(王大夫，关节炎)&好'(关节炎)&有' {好'(关节炎)，了}〕
「格役割演算」

アル ～ガ ～デ 先行スルアルイハ同ジ 先行スル ～ガ ～ニ トル ～ガ ～ヲ
&有' (了，ET) &≤' (ET，RT) &<' (RT，ST) &有' (ST，的)
「時間点演算」

アラワス ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
&有' (的，[様相]) &有' ([様相]，断定)
エラブ ソノ集合ガ 要素[断定]ヲ
「様相演算」

トル ～ガ ～トイウ論理形式の集合ヲ
&有' (断定，[焦点]) &有' ([焦点]，用中草药)
アル ソノ[焦点]ガ ～デ
「焦点演算」

この論理式は「王先生は、漢方薬で、王先生が関節炎を治して、かつ、関節炎が良くなる、かつ、関節炎が良くなる事が[発生]した、かつ、“了”が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点は参照時間点と一致する或いは先行する、かつ、参照時間点(RT)は発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる、かつ、“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ、かつ、断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“用中草药”である。」と読む。

この論理式は四つの演算過程によって構成される。まず、「王先生は、漢方薬で、王先生が関節炎を治して、かつ、関節炎が良くなる、かつ、関節炎が良くなる事が[発生]した」という部分は「格役割演算」を表す式である。

王先生が関節炎を治して、かつ、関節炎が良くなる、かつ、関節炎が良くなることが[発生]した」という部分は「格役割演算」を表す式である。

次に、「了」が出来事時間点(ET)である、かつ、出来事時間点は参照時間点と一致する或いは先行する、かつ、参照時間点(RT)は発話時間点(ST)に先行する、かつ、発話時間点(ST)が“的”をとる」という部分は「時間点演算」を表す式である。

さらに、「“的”が[様相]という論理形式の集合を表す、かつ、その集合が要素[断定]を選ぶ、」という部分は「様相演算」を表す式である。最後に、「断定が[焦点]という論理形式の集合をとる、かつ、その[焦点]が“用中草药”である」という部分は「焦点演算」を表す式である。

以上のことから、まず「格役割」を計算する。さらに、「時間点」を計算し、その後は「様相」を計算して、最後に「焦点」を計算するとすれば、「先に“的”の計算、その後は“是”の計算」のような過程は成立できると考える。

しかし、「焦点が決まること」と「格役割が完全に消去されること」は直接には関連しない。つまり、第一過程の「格役割」の消失は、第二過程の「時間点演算」までに行う必要がある。従って、「時間点演算」の中に「格役割」の要素は生じない。

同様に、第二過程の「時間点演算」が行われた後に第三過程の「様相演算」を行うことが必要である。従って、「様相演算」の中に「時間点演算」の要素は生じない。

さらに、第三過程の「様相演算」が行われた後に第四過程の「焦点演算」が行われる。従って、「焦点演算」の中に「様相演算」の要素は現れない。この現象から各過程の演算の間にお互いを結ぶ要素が存在しないことが分かる。これを解決するために、ここで「連鎖関係」を用いて分析をする。

2.4 “是……的”構文の「連鎖関係」

「連鎖関係」は論理式における命題の間の意味の繋がりを明示するために、論理式における命題の間には「連鎖関係」があると規定する。さらに、連鎖関係とは「二つの命題の連言を $p \ \& \ q$ とすると、 p の命題の第2項が q の命題の第1項になる場合」を言う。また、「 p 全体が q の第1項になる場合」も言う。

このことから、それぞれの演算の間は「連鎖関係」によって結ばれていることがわかる。そして、その「連鎖関係」は以下の通りである。

2.4.1 “我是昨天进的城。”の連鎖関係

进' (我, 城) &有' {进' (我, 城), 了}

&有' (了, ET) &<' (ET, RT) &=' (RT, 昨天) &<' (昨天, ST) &有' (ST, 的)

&有' (的, [様相]) &有' ([様相], 断定)

&有' (断定, [焦点]) &有' ([焦点], 昨天)

以上のことから、この論理式中では、「“进' (我, 城)”と“进' (我, 城)”」が連鎖し、さらに、「“了”と“了”」、「ETとET」、「RTとRT」、「“昨天”と“昨天”」、「STとST」、「“的”と“的”」、「[様相]と[様相]」、「断定と断定」、最後に「[焦点]と[焦点]」が連鎖している。ことがわかる。

2.4.2 “小王是第一个跳下去的。”の連鎖関係

跳' (小王) &到' {跳' (小王), 下去' (小王) &有' {下去' (小王, 了)}}

&有' (了, ET) &≤' (ET, RT) &有' (RT, 第一个) &<' (第一个, ST) &有' (ST, 的)

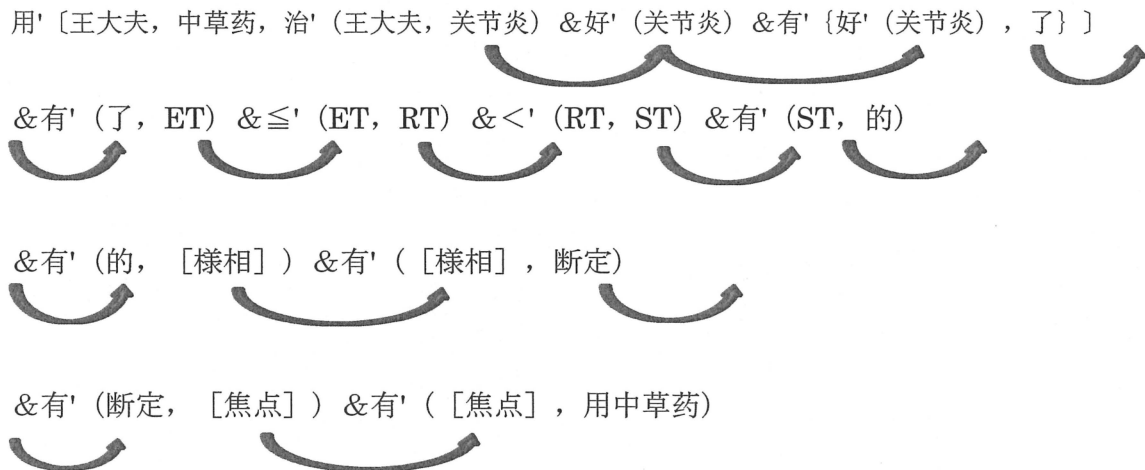
&有' (的, [様相]) &有' ([様相], 断定)

&有' (断定, [焦点]) &有' ([焦点], 第一个)

以上のことから、この論理式中の連鎖関係を示す要素は「“跳' (小王)”と“跳' (小王)”」が連鎖し、「“下去”と“下去”」、「了”と“了”」、「ETとET」、「RTとRT」、「“第一个”と“第一个”」、「STとST」、「“的”と“的”」、「[様相]と[様相]」が連鎖している。ことがわかる。

相]」、「断定と断定」、最後に「[焦点]と[焦点]」の間に連鎖関係が存在していることがわかる。

2.4.3 “王大夫是用中草药治好那个病人的关节炎的。”の連鎖関係



以上のことから、この論理式中の連鎖関係を示す要素は「“好' (关节炎)”と“好' (关节炎)”」が連鎖し、「“了”と“了”」、「ETとET」、「RTとRT」、「STとST」、「“的”と“的”」、「[様相]と[様相]」、「断定と断定」、最後に「[焦点]と[焦点]」の間に連鎖関係が存在していることがわかる。

2.5 本章のまとめ

本章では、张和友(2012: 22)が非典型的“是”に基づいて、新たな観点から“是……的”構文を考察した。まず、“是……的”構文の成立過程について論じた。それは「格役割演算」、「時間点演算」、「様相演算」と「焦点演算」の過程を経て成立できることを説明した。また、それぞれの演算の間には「連鎖関係」が存在することを明らかにした。最後に、論理式を用いて各演算成立過程について論述した。

第3章 焦点の意味の諸相における意味操作と論理分析

3.0 はじめに

本章では焦点について検討する。焦点(focus)は音韻論、文法論、意味論、談話分析などの言語学の各分野で共に興味を持たれている問題であり、形式言語学、機能言語学など言語学の各研究分野においても興味深い問題とされている。言語学の中でこのように注目を浴びる課題は多くない。(徐烈炯:2001)

ここでは焦点を“是……的”構文と“位置置換文”の二つに分けることとする。

まず、第一節の論点は“是……的”構文の焦点である。そこで、主に刘丹青・徐烈炯(1998)と袁毓林(2003)の焦点に関する論考に基づいて、本論では統語の角度から“是……的”構文における焦点の分析法を提示し、論理式を用いて分析する。また、この節の考察で採用した「±排他性」・「±突出性」という概念は“是……的”構文以外の言語現象にも説明として用いることができる。そこで第二節では「位置置換焦点」を論点として検討する。

さらに、刘丹青・徐烈炯(1998)と徐烈炯(2002)の分析法を基に、陆俭明(1980)が主張している位置置換という現象に対し、後置された部分を「焦点」と見なす。陆俭明(1980)が言及していない「意味操作」の角度に着目にして「位置置換現象」を考察する。

最終的に、第一節の考察で採用した焦点の分析法が“位置置換文”に適用できることを論じる。この観点が成立できることを証明するために、それぞれの研究を紹介し、主として諸研究に基づき「焦点」について説明し、本論における「焦点」の性質・意味と論理式について述べる。

3.1 “是……的”構文における焦点

3.1.1 刘丹青・徐烈炯(1998)の記述

刘丹青・徐烈炯(1998)は、焦点は「自然焦点」、「対比焦点」、「話題焦点」によって構成されると主張している。

3.1.1.1 「自然焦点」

「自然焦点」は発話者が最も強い情報を与えた部分であり、文の他の部分を背景とする。中国語では、文末が文の自然焦点の位置となる。さらに、この類の特徴は「+突出」・「-対比」である。(刘丹青・徐烈炯 1998: 245)

- (56)a. 他三十年来一直住在芜湖。 (自然焦点：“芜湖”)
b. 他在芜湖一直住了三十年。 (自然焦点：“三十年”)

(56a)では、「自然焦点」の“芜湖”は「+突出」・「-対比」の性質を持つ。理由は

発話者が最も情報を与えたい部分は文末にあるからである。と述べており、(56a)文の意味は彼が三十年の間でずっと住んでいる「場所」を強調する。同様に、(56b)の焦点は文末にある“三十年”である、この場合において、“三十年”は「+突出」・「-対比」の性質を持つ、文の意味は彼が芜湖に住んでいた「時間」を強調することが分かる。

3.1.1.2 「対比焦点」

「対比焦点」は二重の背景がある。それは文中で最も突出された情報であり、同時に文脈、或いは共有知識の中(特に聞き手の前提中)で存在した特定の対象に、或いはすべて他の同類対象に対し、特に突出させた、文外の背景対象と比べる作用がある。さらに、この類の特徴は「+突出」・「+対比」となり例は以下のようになる。

(57)a. 老王上午借给老李一笔钱。 (対比焦点：“老王”)

b. 老王上午借给 老李一笔钱。 (対比焦点：“老李”)

(刘丹青・徐烈炯 1998:245)

(57a)では、「対比焦点」の“老王”は「+突出」・「+対比」の性質を持つ。理由は“老王”の前にストレス(強勢)が置かれるからである。と述べており、(56a)文の意味はお金を借りたのは他の人ではなく、王さんであることを強調する。

一方、(57b)の「対比焦点」は“老李”である。この場合の“老李”は「+突出」・「+対比」の性質を持つ。その理由は“老李”の前にストレス(強勢)が置かれるからである。さらに、文の意味はお金の受益者は他の人ではなく、李さんであることを強調する。ことが分かる。

3.1.1.3 「話題焦点」

「話題焦点」は「自然焦点」ではなく、同様に一般的な意味の「対比焦点」でもない。それは「対比」だけがあり、「突出」がない焦点である。すなわち、話題焦点はただ文外にある話題成分、或いは認知成分を背景とするだけで、文の他の部分を背景とすることはできない。

(刘丹青・徐烈炯 1998:247)

この類の特徴は：「-突出」・「+対比」である。例を挙げると以下のようになる。

(58)a. 夜到末，朝北房间会有暖气个。(晚上么，朝北的房间会有暖气的。)

(話題焦点：“夜到末”(晚上么))

b. 夜到朝北房间末，会有暖气个。(晚上朝北的房间么，会有暖气的。)

(話題焦点：“夜到朝北房间末”(晚上朝北的房间么))

(58)の例では、前の文は上海語であり、後ろの文は北京語の翻訳である。刘丹青・徐烈炯(1998)は「上海語の“末”と北京語の“么”は「焦点標識」の機能があるので、(58a)の「話題焦点」“夜到末(晚上么)”は「-突出」・「+対比」の性質を持つ。」と述べる。さらに、文の意味は暖房がある「時間」について、昼間ではなく、夜であることを強調すると分かる。

一方、(58b)の「話題焦点」は“夜到朝北房间末(晚上朝北的房间么)”であり、この場合の焦点は「-突出」と「+対比」の性質を持つ。文の意味は夜で暖房がある「場所」について、南向きの部屋ではなく、北向きの部屋であることを強調することが分かる。

さらに、この三類の焦点において、各焦点の特徴における共通点と相違点についても述べる。

まず、「自然焦点」と「話題焦点」の場合について、両者の間に共通点は存在しない、相違点：「自然」の焦点は文末にあり、「話題」の焦点は文頭にある。

次に、「話題焦点」と「対比焦点」の場合について、両者共に「+対比」の共通点がある。しかし、相違点も存在する。それは「情報機能が異なること」と「省略することが可能／不可能の部分」である。例えば、「話題焦点」では、述語の部分を省略することができない。一方、「対比焦点」では、主語の対比焦点も含む、文脈或いは背景知識の支えの中で、自然に文の他の成分を省略することができる。

最後に、「自然焦点」と「対比焦点」の場合について、両者共に「+突出」という共通点がある。相違点は情報の強度及び焦点範囲の明示化である。例えば、情報の強度について、「自然焦点」は“+”・“-”の性質を持つことに對し、「対比焦点」は“+”・“-”の性質である。焦点範囲の明示化について、「自然焦点」の文末の位置は通常自然焦点であるが、文末より前の範囲を明示化しない。「対比焦点」では、アクセント或いは標記詞、マーカによって焦点の範囲を決める。

3.1.2 徐杰・李英哲(1993)、徐杰(2001)の記述

徐杰・李英哲(1993)は「焦点は文の中にある文法単位の一つの機能属性で、それは発話者が強調する重点である。」と述べる。

徐杰・李英哲(1993)によると

「焦点有广义和狭义之分。狭义的焦点一般指的仅是那些用特定的语法形式标明的句法单位。广义的焦点是说话者强调的重点这一本质属性作为出发点，来识别焦点成分，归纳其特征。

(焦点は広い意味と狭い意味の区別がある。狭い焦点が指示するのは特定の文法形式によって示された統語単位である。広い焦点は発話者が強調する重点という本質的属性を出発点として焦点成分を識別し、さらに、その特徴を概括する。)」と主張している。

さらに、徐杰(2001)は刘丹青・徐烈炯(1998)が述べている焦点に関する考えを賛成しているが、以下四つの議論点も提示している。

- 〈Ⅰ〉背景は文中と文外の二つの形式で表示するが、表示方式のこのような差別は焦点の性質に対して実質の影響が存在しない。
- 〈Ⅱ〉「対比焦点」では、対立している「突出」と「対比」二つの特徴は共存することは適当ではない。その理由は、背景が文中と文外と同時に現れるからである。
- 〈Ⅲ〉共通する統語特徴が存在しない。
- 〈Ⅳ〉「突出」と「対比」は因果関係である。
その理由は、「対比」は「突出」の前提と条件であるからである。

つまり、徐杰(2001)は「突出」と「対比」が矛盾していると指摘する。

3.1.3 何元建(2011)の記述

何元建(2011)は、生成文法の枠組みで現代中国語文法の全面的な記述を行った。何元建(2011)は“是……的”構文の焦点について考察し、“是”は焦点標識であると主張している。そして、何元建(2011: 391, 395, 399)では“是……的”構文の焦点を三種類に分け、「主語或いは目的語が焦点」、「間接目的語或いは補語が焦点」と「状況語焦点」とした。この三つの焦点において、各焦点の特徴は以下のように記述されている。

- 〈Ⅰ〉「主語或いは目的語が焦点」の場合では“是”の機能によって焦点が決められる。
 - ・主語が焦点になる場合において、主語は必ず焦点語“是”の後ろに付けなければならない。(例：“是张三戴隐形眼镜的。”)
 - ・目的語が焦点になる場合において、動詞は必ず焦点語“是”の後ろに付けなければならない。(例：“张三是戴隐形眼镜的。”)
この場合では、“的”を取ると焦点の変化はない。しかし、“是”を取ることにより焦点は目的語だけになることが可能であるが、主語になることは不可能であると述べる。
- 〈Ⅱ〉「間接目的語或いは補語が焦点」の場合では、間接目的語が二重目的語及び与格文の中に現れる。ここで言及している補語には三つの成分があり、それは「動作量詞」、「場所」と「結果」である(何元建 2011:396)。これらの成分は焦点構造の中に入れることが可能と述べており、さらに、この場合では“是”直後の成分は焦点であり、或いは“是”の直後の成分の中で最も近い名詞性成分が焦点になる

ことが可能である。

- Ⅲ「状況語焦点」の場合は、状況語は焦点構造の中に現れるだけで、焦点になることが可能である。この場合では状況語は“是”直後に付き、助詞は文末に現れることが可能であると述べる。

3.1.4 袁毓林(2012)の記述

袁毓林(2012)によると「焦点は狭い焦点と広い焦点によって構成される」とされ、また、「“的”の前方移動は焦点の作用域を縮める役割を果たす」と主張している(袁毓林:2012: 6)。具体的な用例としては以下のようなものがある。

- (59) 是她来找我的。 (袁毓林 2012)
(60) 是瓦特发明蒸汽机的。 (袁毓林 2012)
(61) 是瓦特发明的蒸汽机。 (袁毓林 2012)

袁毓林(2012)の記述によれば、(59)の“是……的”構文における狭い焦点は“她”であり、広い焦点は“她来找我”である。そして、“的”の前方移動する前の(60)の広い焦点は“瓦特发明蒸汽机”である。さらに、“的”の前方移動が行われた(61)の広い焦点は“瓦特发明”であり、その目的語は焦点の作用域から外れ、焦点の範囲を縮小する役割を果たしている。これが目的語の「脱焦点」という現象である。

さらに、袁毓林(2012)は「事態文においては“(是)……的”構造が表す焦点は意味焦点(semantic focus)である」と述べており(袁毓林:2012:7)、意味焦点は情報焦点(informational focus)と呼ばれ、それは前提のない新情報を伝える。

この焦点は文の真理条件(truth-condition)とかかわると主張している。

また、袁毓林(2003)は事態文(“是……的”構文)の焦点は「認定焦点」であり、「+対比性」・「+排他性」の二つの意味特徴を具有していることにより、事態文は通常「確定」と「確信」の意味を表すとしている。(「+排他性」は狭い焦点として扱う。)

例を挙げると以下のようなになる。

- (62)a. 这一真知灼见，在几十年后的今天看来，更觉得难能可贵。(文艺:99)

(袁毓林 2012)

(この正しい明確な見解は、数年後の今日において、本当に素晴らしいと思う。)

- b. 这一真知灼见，在几十年后的今天看来，更觉得是难能可贵的。(袁毓林 2012)

(この正しい明確な見解は、数年後の今日において、本当に素晴らしいものだったと思う。)

(62a)の例では、“是……的”構造が新しく作る表現法はそれに対応する事件文の事態文があらわす[確認]という文形意味を実現しているのである。

(62a)では「难能可贵」は「素晴らしい」ことを表現し、対比する概念は存在しない。従って、「素晴らしいものだ」ということについて、“是……的”構造に入れることが成立する。さらに、「难」と「容易」が対比されているので、“更觉得难能可贵”の“难”を“容易”と対比することによって、「排他性」が生まれ、(62b)は[+排他性]になる。

(63)a. 小王参加了班级联欢会。 (袁毓林 2003)

(王さんはクラスの忘年会に参加した。)

b. *是小王参加了班级联欢会的。 (袁毓林 2003)

(王さん(だけ)がクラスの忘年会に参加したのだ。)

(63a)は「参加した人は小王だけではなく、小王以外に参加した人もいる。たとえば、张三、李四も联欢会に参加した。」という意味を示す。また、袁毓林(2003)は「(63b)は成立しない文である」と述べる。その原因は事態文中の認定焦点の[排他性]という特徴にある。

一方、本論では(63b)の文は、“是……的”構造があることにより「小王の前に“是”を加えるので“小王”だけが联欢会に参加した」という意味を示す。袁毓林(2003)が主張している成立しない文については、「排他性」を用いて説明することができる。その理由は、袁毓林(2003)は事態文と事件文の間の形式に注目し過ぎたために、(63)の文において、本来の言語感覚を見失っていると言わざるを得ない。

3.1.5 杉村博文(1999)の記述

杉村博文(1999)によると事件文全体が焦点となることができる。杉村博文(1999)も袁毓林(2012)と同様に、「広い焦点」の角度から“是……的”構文を考えている。用例として以下の文を挙げている。

(64) 你在办公室里干什么？再不出来，我给你告诉村支出去。

唉，工作组的老张同志把我锁在屋里的。 (杉村博文 1999)

(君は事務所の中で何をしているの？出てこないと書記に言いつけるよ、

いや、そうではなくて、グループの張さんが私を部屋の中に閉じ込めたのだ。)

(65) 这时，他忽听一声惊心的喊叫：“王掉，你被捕了。”

他吃惊地坐起来，不，是两位人民警察把他揪起来的。 (杉村博文 1999)

(このとき、彼は急にビクッリするくらいの大声を聴いた“王掉、君は逮捕された！”

彼はびっくりして起きた、いや、二人の警察官が彼をつかんだのだ。)

以上杉村博文(1999)の記述と用例は、文末の“的”が前の文全体を焦点とする。

これにより(64)の“工作组的老张同志把我锁在屋里”を焦点化することになる。この文では、傍線部に“是”はないが、“的”構造が答えの文になることにより、全文で「説明」と「弁明」をしているのである。そして、(65)の文では、“是”と“的”両方があるので、広い焦点は“是”と“的”の間の文全体で“两位人民警察把他揪起来”であると分かる。

3.1.6 青木萌 (2017)の記述

青木萌(2017)は焦点について分析を行う中で、「様態」や「原因」を表す成分が“(是)……的”構文の焦点対象になると主張した。具体的な用例としては以下のようなものがある。(2017:23)

〈Ⅰ〉「様態表現」が“(是)……的”構文の焦点となる例。

(66) “一口气”が焦点。

每天前来罚我的是二楼中班的 一个马马虎虎的胖男孩，由于我父母是一口气生的我们哥儿俩，这胖孩子也就比我大一岁，阅历不多，智力体力发展也不平衡，遇到这种情况百思不得其解，想到的对策就是请我吃耳光。

(王朔「看上去很美」,『王朔文集』:2頁)

(私の両親は一息で私たち兄弟二人を生んだのだ。)(青木萌 2017)

(67) “抱着大少爷的排位”が焦点。

干爹，您有所不知，我打扫的事儿啊，在全高密大家都知道，她和单家大少爷刚定完亲，大少爷就死了。可我嫂子呢，她还是选择从一而终，她是抱着大少爷的排位进的单家，进了家门就寡妇，一直守到现在。

(テレビドラマ『紅高粱』第7話)

(彼女は兄さんの位牌を抱えて単家に嫁いだのだ。)(青木萌 2017)

〈Ⅱ〉「原因表現」が“(是)……的”構文の焦点となる例。

(68) “因为”が焦点。

A: 受不了啊？那你回家去。

B: 回家？我现在回家，回头让人说，刘星是因为没钱吃饭了回的家。

我这脸往哪儿放啊！多丢人呐！

(テレビドラマ『家有儿女』(第三部)第43話)

(劉星はごはんを食べるお金が無くなったが故に家に帰ったのだ。)

(青木萌 2017)

(69) “为这”が焦点。

A：鬼子已经进山东了，你知道吗？

B：我知道。我就是为这回的东北乡。（テレビドラマ『紅高粱』第42話）

（私はそのことが原因で東北の里に帰ったのだ。）（青木萌 2017）

(70) “由希特勒的一本《我的奋斗》”が焦点。

几年来的战争，都是由希特勒的一本《我的奋斗》闯的祸，这一本书害了多少人？

（胡适『自由人生』：3頁）

（数年来の戦争はいずれもヒトラーの『我が闘争』が引き起こしたのだ。）

（青木萌 2017）

以上の記述から、青木萌(2017)は“焦点”を「様態表現」と「原因表現」に区分して述べている。

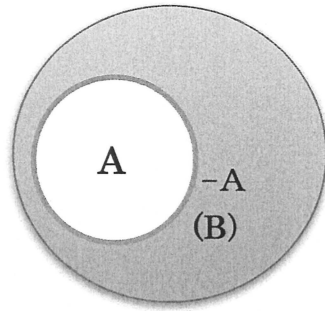
3.1.7 本論文の捉え方

以上、諸研究者の焦点についての考察を論じてきたが、本章では、刘丹青・徐烈炯(1998)と同様に、「焦点は“是”の直後の部分」であると考え。焦点は文の中で意味上最も重要な情報であり、焦点化された成分は新情報だけでなく、旧情報も含む。その中で最も重要な情報は、一定の統語手段で表すことができる。そこで、この観点を参考にしながら“是……的”構文がどのように分析可能であるかを見ていくことにする。

ここも徐杰(2001)の考えを参考に、刘丹青・徐烈炯(1998)が主張している焦点性質中の「突出性」だけを取りあげ、また袁毓林(2003)が述べている「排他性」も導入し、三者を総合して新たな観点から論理分析していきたい。

3.1.8 “是……的”構文における「断定焦点」とは何か

ここでは袁毓林(2003)の考えを基に、「排他性」は一つの集合の中で、Aは下位集合であり、A以外の物は全部排除し、それを-A(B)の「補集合」と見なす。これを〈図3-1〉で示すと以下のようなになる。（この図は「集合論^(註7)」に基づいて書いたものである。）



〈図 3-1: 集合論における焦点の分布図〉

(方立 2000:37)(図のタイトルは筆者による)

〈図 3-1〉から、A の部分：「+突出性」・「+排他性」であり、- A(B)の部分：「-突出性」・「-排他性」であることが分かる。

〈図 3-1〉から、A は「焦点標識の“是”の直後の部分は「+突出性」・「+排他性」という二つの性質をもつ、焦点の集合である」と考える。“-A(B)”は「焦点標識の“是”の直後に直接当たらない部分を「-突出性」・「-排他性」という二つの性質を持つ、補集合である」と考える。

また、本論では「突出性」・「排他性」の性質を持つ特徴は“是……的”構文に用い、「断定焦点」と呼ぶことにする。その理由は“是”は焦点標識の機能があり、“的”は「断定」の意味を持ち、二つの間に関連性が存在すると想像できるからである。

3.1.9 「断定焦点」による考察

そこで、“是……的”構文の焦点についてに分析する。以下の(71)と(72)における焦点を見られたい。

(71) 是她来找我的。 (彼女が私を探しに来たのだ。)

(72) 我是吃饱了回来的。 (私は腹いっぱい食べた後に帰って来たのだ。)

(71)の文の原形は“她来找我了”である。刘丹青・徐烈炯(1998)による「自然焦点」の角度から焦点は“我”であると分かる。しかし、目的語の後ろに“了”を加えることによって、焦点は“了”の前の全文の“她来找我”になると考える。その理由は、文末にある“了”は“的”と同じ機能を持ち、“的”は文全体(発生)を断定する意味を持つからである。

しかし、“是”を加えることによって、焦点は“她”となる。その理由は“是”が焦点を明示化する機能があり、及び“是”の直後にある“她”は「+突出性」・「+排他性」

の性質があるからである。一方、“是”の直後ではない“来找我”の部分は「－突出性」・「－排他性」であると考える。

上述のことから、「＋突出性」・「＋排他性」の成分は“她”であり、「－突出性」・「－排他性」の成分は“来找我”である。ここでは「誰かが私を探しにきた」を前提として、その誰かが“她”という特定の人物であると決められると考える。

(72)の文では、元々の原形は“我吃饱了回来”であり、刘丹青・徐烈炯(1998)による「自然焦点」の角度から焦点は“回来”であると分かる。しかし、“是”を加えることによって、焦点は“吃饱”となる。その理由は“是”が焦点を明示化する機能があり、及び“是”の直後にある“吃饱”は「＋突出性」・「＋排他性」の性質があるからである。一方、“是”の直後ではない“回来”の部分と“是”の前にある主語の“我”は「－突出性」・「－排他性」であると考える。上述のことから、「＋突出性」・「＋排他性」の成分は“吃饱”であり、「－突出性」・「－排他性」の成分は“回来”と“我”である。

さらに、助詞を表す「が」と「は」の区別によって、焦点を決める。例えば(71)の文では、焦点標識の“是”は主語“她”の後ろに置かれると、

(71)a. 她是来找我的。 (彼女は私を探しに来たのだ。) になる。

(71a)の「断定焦点」は“来”である。その理由は、この場合の“来”は「＋排他性」・「＋突出性」の性質があり、さらに、“来”も焦点標識“是”の直後にあるからである。さらに、文中にある“找我”と“她”は「－突出性」・「－排他性」の性質があるので、非焦点成分と考えており、それは焦点標識“是”の直後に当たらないからである。

そして、(17)の文では、焦点標識の“是”は主語“她”の後ろに置かれると、

(72)a. 是我吃饱了回来的。 (私が腹いっぱい食べた後に帰って来たのだ) になる。

(72a)の「断定焦点」は“我”である。その理由は、この場合の“我”は「＋突出性」・「＋排他性」の性質があり、さらに、“我”も焦点標識“是”の直後にあるからである。さらに、文中にある“吃饱了回来”は「－突出性」・「－排他性」の性質があるので、非焦点成分と考えており、それは焦点標識“是”の直後に当たらないからである。

ここでは「誰かがご飯を食べて帰ってきたの」を前提として、その誰かが“我”という特定の人物であると決められると考える。

3.1.10 本節のまとめ

焦点を明白にするためには“是”を加える。本論では以下のように主張する。

- ・“是……的”構文の中に焦点標識“是”が現れる場合は、“是”の直後の部分が「+突出性」、「+排他性」であり、他の文成分は「-突出性」、「-排他性」である。

この節の結論としては、焦点標識“是”の直後の成分は焦点であり、「+突出性」・「+排他性」の機能があり、「断定焦点」とした。しかし、他の構文において、焦点かどのように構成されるかについては、さらに検討する必要がある。本章では“是……的”構文の焦点について論じるだけでなく、焦点標識“是”を持たない文の焦点についても論じてゆきたい。そこで、陆俭明(1980)が論じた《汉语口语句法里的易位现象》の各例に対し、意味操作の観点から焦点を検討する。

3.2 「位置置換文」における焦点

3.2.1 位置置換文とは

中国語の中で一番重要な特徴は厳密な“形態標識”と“形態変化”がないことである。従って、中国語では一つの統語構造に相互対立する、または相互依存する文法成分が多くある。例えば、主語と述語、修飾語と中心語、述語と目的語などである。これらの位置は比較的固定している。しかし、口語の中では弾力的に位置を置換することができる。

例えば、“你哥哥来了吗？”と“大概走了吧。”の二つの文は口語の中では、前後の成分を入れ替えることができる。

(73) 来了吗，你哥哥？ (陆俭明 1980)

(74) 走了吧，大概。 (陆俭明 1980)

陆俭明(1980)は、このような現象は「位置置換現象(易位现象)」であり、口語文法の中で特有一つの現象であると主張している。

そして、(73)と(74)に対し、“来了吗”と“走了吧”は「前置部分」(前に置かれる部分)であり、“你哥哥”と“大概”は「後方置換部分」(後に移動した部分)であると述べ、この種の位置置換文を文章で書くときは、お互いの位置置換をした二つの部分の間に“，”を加えることにする。さらに、ここで加えた“，”は「音声停頓」を表すものではなく、位置置換を表すことを示している。

さらに、朱德熙(1984)がこのような操作と似ている現象は「倒置」である。朱德熙(1984：304)は倒置について、以下の観点を主張した。

「通常は、主語は必ず述語の前にあり、修飾語は中心語の前にあり、目的語と補語は必ず動語の後ろにある。しかし、場合によっては、これらの順序が転倒することもありうる。それは、主語が後置される、修飾語が後置される、目的語が前置される、補語が前置されると述連構造の前後二つの直接構成素の位置が転倒する」の五つの点について主張した。

〈Ⅰ〉主語が後置される場合：

- ・快进来吧，你。 (さっさとお入りなさい、あなたは。)
- ・修好了没有，那辆车？ (直りましたか、あの自転車?)
- ・真有意思，这个人！ (ほんとにおもしろいな、この人は！)

〈Ⅱ〉飾語が後置される場合：

- ・九点半了，都。 (九時半だよ、もう。)
- ・掉点儿了，已经。 (ぼつりぼつり降りだしたよ、もう。)
- ・找着了，大概。 (見つかったよ、たぶん。)

〈Ⅲ〉目的語が前置される場合：

- ・他出国了，听说。 (彼は海外へ行ったよ、聞くところによると。)
- ・不会再地震了，估计。 (もう地震は起こりっこないよ、思うに。)

〈Ⅳ〉補語が前置される場合：

- ・气都喘不过来了，跑得。 (息もつけないよ、走りすぎて。)
- ・吓死人了，说得。 (まったくびっくりさせるぜ、言うことが。)

〈Ⅴ〉述連構造の前後二つの直接構成素の位置が転倒する場合：

- ・快结婚了，跟他。 (もうすぐ結婚します、彼と。)
- ・上北海去了，带着孩子。 (北海公園に行きました、子供を連れて。)
- ・快回去吧，叫他。 (さっさと帰らせよう、彼を。)

朱德熙(1984:305)は「この種の表現は口語に限って見られるものである。」と述べる。さらに、前置された部分は、話し手が言表を急ぐあまりに口をついて出たものであり、後の部分には補足のニュアンスが含まれる。特に注意すべきことは、後置される部分は必ずストレスを置かずに発音されるということであり、そのことはこの種の「倒置文」における最も明示的な標識である。ここでも朱德熙(1984:304-305)の考えも参考に、分析する。

3.2.2 位置置換文の特徴

陆俭明(1980)によると「位置置換文」には四つの特徴があると主張している。各「位置置換文」の特徴は以下のように記述されている。

〈Ⅰ〉重音(アクセント)は必ず前置部分にあり、後方置換部分は必ず軽音である。

例：来了吗，你哥哥？ 重音部分：“来” 軽音部分：“你哥哥”

走了吧，大概。 重音部分：“走” 軽音部分：“大概”

〈Ⅱ〉意味の重心は前置成分にある(すなわち、後方置換部分は強調の対象にならない)

意味中心：“来了吗”と“走了吧”

〈Ⅲ〉倒置された成分は共に元の位置に戻る(複位する)ことができる。

例：来了吗，你哥哥？＝你哥哥来了吗？

走了吧，大概。＝大概走了吧。

〈Ⅳ〉文末語気詞は「後方置換」の後ろに現れることはできず、必ず前置部分につける。

例：*来了，你哥哥吗？

*走了，大概吧。

ここで、陆俭明(1980)は(73)の“来了吗，你哥哥？”と(74)の“走了吧，大概。”に對し、説明を行っている。

一つ目の特徴は重音部分が“来”と“走”であり、軽音部分は“你哥哥”と“大概”である。二つ目の特徴は意味重心が“来了吗”と“走了吧”である。三つ目の特徴は示す意味が同じである。すなわち、“来了吗，你哥哥？＝你哥哥来了吗？”で、“走了吧，大概。＝大概走了吧。”である。

最後に四つ目の特徴は、語気詞の“吗”と“吧”は後ろに置いた“你哥哥”と“大概”の後ろに現れることができない、必ず前置部分にある“来了”と“走了”の後ろに置かれることが分かる。

3.2.3 本論文の捉え方

陆俭明(1980)は「形式操作」の角度から「位置置換現象(易位現象)」を分析した。意味の角度からの分析については言及していない。そこで、本節では陆俭明(1980)が主張している「位置置換現象」の観点を参照しながら、「意味操作」の角度に着目にして「位置置換現象」を考察する。また、朱德熙(1984)が主張している「倒置文」の観点(後置される部分は必ずストレスを置かずに発音されるということ)も参考として、「後方置換部分」を「焦点」と見なすと考えてゆきたい。

しかし、この考え方が妥当であるかどうかについて検証するために、ここでは徐烈炯(2002)が主張している「情報焦点」の考えを用い、新たな観点から論理分析する。

3.2.4 「情報焦点」とは何か

徐烈炯・刘丹青(1998)と刘丹青・徐烈炯(1998)によると、中国語のこのような文末に

位置する焦点を「自然焦点」と呼んでいた。しかし、徐烈炯(2002)では「焦点基本位置を情報焦点というこの焦点は文末に置くことができる」と主張するようになった(徐烈炯 2002 : 21)。中国語の語順には一定の活用性があると見なされ、情報焦点を最後に置く。

徐烈炯(2002)の観点を紹介するために、他の言語が「情報焦点」に対してどのような観点と有するかについて、ここでは簡単に紹介しておこう。

Kiss(1995b)は「焦点の構造化では焦点が指示するのは対比焦点である」と述べている。(徐烈炯 2002 : 407)さらに、Kiss(1998)によると「ハンガリー語の対比焦点は専用の構造位置に使うが、情報焦点は通常的位置(常規位置)に使う」とする。(徐烈炯 2002 : 407)

多くの言語において、例えば、英語では、情報焦点を表す主な手法は語調である。英語の文は一つの“語調核”を含む。“語調核”の位置と情報焦点は一致し、少なくとも情報焦点の中にある。(徐烈炯 2002 : 407)

一方、中国語においては、語調はすでに他の役割として使っている。それは語義を区別し、叙述文、疑問文などを区分するものである。従って、中国語ではアクセント(強く発音する)の方式を使い焦点を表示する。さらに、英語と中国語はさらにもう一つの違いがあり、それは英語では焦点と話題は異なる音調を使い、焦点を発音するときは調子が下げる(↓)、話題を発音するときは調子が“抑揚調”(↗)を使うことである。(徐烈炯 2002 : 407)

中国語では「情報焦点」と話題は異なる音声形式で表現することはない。もし一つの文中に「情報焦点」がありさらに話題もあるとき、両者は共に強く発音することができる。或いは、長く読むこともできる。「情報焦点」は話題より強く発音するのではなく、同様に、話題を「情報焦点」より強く発音するわけではない。(徐烈炯 2002 : 407)

中国語は発音手段により焦点を表すことには制限があるので、必然的に文法手段を借用することになる。一般的に中国語においては統語論が認める条件の中で、「情報焦点」を文末に置く。(徐烈炯 2002 : 407)

以上の記述から、「情報焦点」は文末に置かれることが分かった。陆俭明(1980)が主張している「位置置換現象」に「情報焦点」という観点を加えて、「後方置換部分」を「焦点」と見なすことができると考える。ここで論じたい「焦点」は徐烈炯(2002)が主張している「情報焦点」を基にしている。

3.2.5 焦点の定義

徐烈炯(2002)は「情報焦点は動詞の後ろの名詞詞句」と述べているが、その焦点の定義は陆俭明(1980)と徐烈炯(2002)を参考にすると以下のものである。

- 〈Ⅰ〉 焦点はその前に音声の停頓がない。 (陆俭明 1980 : 62-63)
- 〈Ⅱ〉 焦点はストレス(強勢)が置かれない。 (陆俭明 1980 : 63)
- 〈Ⅲ〉 通常焦点は文末に置かれる。 (徐烈炯 2002 : 407)

焦点の定義を上記の〈Ⅰ〉から〈Ⅲ〉とすると陆俭明(1980)の扱った文成分の位置置換は統語的にも意味的にも「焦点」であると考えることができる。さらに、「突出性」・「排他性」の考えも加えて「位置置換焦点」について考察する。

3.2.6 「位置置換焦点」の意味操作と論理分析

3.2.6.1 位置置換焦点が“主語”の意味操作と論理分析

徐烈炯・刘丹青(1998 : 51,61,75)は語順から話題を「主話題」(main topic)、「次話題」(subtopic)、「次々話題」(sub-subtopic)の三種類に分けた。

- ・「主話題」は文頭の話題で、すなわち全文の話題である。
 - ・「次話題」は主語と動詞フレーズ間の話題で、すなわち、述語の話題である。
 - ・「次々話題」は動詞の後ろにある話題を指す、すなわち、兼語式である。
- と二重目的語の文中の兼語成分と間接目的語である。

徐烈炯・刘丹青(1998)の観点は、異なる性質を持つ話題の機能及び意味の分析に極めて有効であるので、この考えも参考にして、主語が後方に置かれる文について分析する。さらに、陆俭明(1980)が挙げている主語が後ろに置換される文について、論理式を用いて分析していく。

まず、次の(75)の文を考えよう。

(75) 来了吗，你哥哥？ (来ましたか?君のお兄さんは。)

(75)は主語の“你哥哥”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(75a)である。

(75)a. 你哥哥来了吗？ (君のお兄さんは来ましたか?)

(75a)の意味は論理式で示すと次のようになる。

[完了] [完了] [疑問] アラワス ～ガ

(75)a'. 来' (你哥哥)&有' {来' (你哥哥), 了} &有' (了, 吗)&有' (吗, [様相])

クル ～ガ スル ～ガ ～ヲ ツク ～ニ ～ガ ～トイウ論理形式ヲ

この論理式は「君のお兄さんが来る、かつ、君のお兄さんが来る事が[完了]をする。かつ、[完了]に[疑問]の“吗”がつく、かつ、“吗”が[様相]という論理形式を表す。」と読む。

この場合の“吗”は“的”と同類と見なす。つまり、“吗”は[疑問]を表し、[疑問]は[様相]であると考ええる。

(75a')の論理式をもとにして(75)の文の論理式を書くと次のようになる。

クル ～ガ ～ガ [完了] ヲ [完了] [疑問]

(75)' 来' (u)&有' {来' (u), 了} &有' (了, 吗)

スル ツク ～ニ ～ガ

アラワス ～ガ ～ヲ モツ ～ガ ～ヲ

&有' (吗, [様相])&有' ([様相], [焦点])

[様相] トイウ [焦点]

論理形式ヲ トイウ論理形式ヲ

アル ～ガ ～デ アル ～ガ ～デ

&=' ([焦点], u)&=' (u, 你哥哥)

この論理式は「uが来る、かつ、uが来る事が[完了]をする、かつ、[完了]に[疑問]の“吗”つく、かつ、“吗”が[様相]という論理形式を表す、かつ、[様相]が[焦点]という論理式をもつ、かつ、[焦点]がuである、かつ、uが“你哥哥”である」と読む。

ここで、(75)の“来了吗，你哥哥？”という文において、本来先頭にある主語の“你哥哥”が後ろに来ている。“你哥哥”という部分が後方置換された文である。“来了吗”の文においては、「誰が来たのか」が分からないので、元々ある位置の部分は“変数”の“u”に置き換えることにする。

さらに、この文の焦点は“你哥哥”である。その理由は、まず“来了吗”と“你哥哥？”の間に音声の停頓がない。また、“你哥哥”の部分は強く発音しない。さらに、“你哥哥”

は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排他性」である。従って、“你哥哥”は焦点定義の条件を満たしたので、“你哥哥”を焦点と見なすことができる。

次に、主語が動作主とされる動詞述語の例について、焦点の論理構造も示しておく。

(76) 放假了吗，你们？ (休暇しましたか？君たち。)

(76)は主語の“你们”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(76a)である。

(76)a. 你们放假了吗？ (君たちは休暇しましたか?)

(76a)の意味は論理式で示すと次のようになる。

[完了] [完了] [疑問] アラワス ～ガ

(76)a'. 放假' (你们)&有' {放假' (你们), 了} &有' (了, 吗)&有' (吗, [様相])

休暇スル ～ガ スル ～ガ ～ヲ ツク ～ニ ～ガ ～トイウ論理形式ヲ

この論理式は「君たちが休暇する、かつ、君たちが休暇することが[完了]をする。かつ、[完了]に[疑問]の“吗”がつく、かつ、“吗”が[様相]という論理形式を表す。」と読む。この場合の“吗”は“的”と同類と見なす。つまり、“吗”は[疑問]を表し、[疑問]は[様相]であると考え、

(76a')の論理式をもとにして(76)の文の論理式を書くと次のようになる。

休暇スル ～ガ ～ガ [完了] ヲ [完了] [疑問]

(76)' 放假' (u)&有' {放假' (u), 了} &有' (了, 吗)

スル ツク ～ニ ～ガ

アラワス ～ガ ～ヲ アル ～ニハ ～ガ

&有' (吗, [様相])&有' ([様相], [焦点])

～トイウ論理形式ヲ

アル ～ガ ～デ アル ～ガ ～デ

&=' ([焦点], u)&=' (u, 你们)

この論理式は「u が来る、かつ、u が休暇することが[完了]をする、かつ[完了]

に[疑問]の“吗”がつく、かつ、“吗”が[様相]という論理形式を表す、かつ、[様相]には[焦点]がある。かつ、[焦点]がuである、かつ、uが“你们”である」と読む。

ここで、(76)の“放假了吗，你们？”という文において、本来先頭にある“你们”が後ろに来ている。“你们”という部分が後方置換された文である。“放假了吗”の文においては、「誰が休暇するのか」が分からないので、元々ある位置は“変数”の“u”に置き換えることにする。

さらに、この文の焦点は“你们”である。その理由は、まず“放假了吗”と“你们？”の間に音声の停頓がない。また、“你们”の部分は強く発音しない。さらに、“你们”は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排他性」の性質を持つ文である。従って、“你们”は焦点定義の条件を満たしたので、“你们”を焦点と見なすことができる。

次に(77)の例を考えよう。

(77) 看完没有，那小说？（読み終わりましたか？あの小説を。）

(77)は主語の“那小说”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(77a)である。

(77)a. 那小说看完没有？（あの小説を読み終わりましたか?）

この文の意味は論理式で示すと次のようになる。

読ム ～ガ ～ヲ スル ～ガ 完了
(77)a'. 看' (你, 那小说)&有' {看' (你, 那小说), 完}

マタハ シナイ ～ガ 完了
V ～ {有' {看' (你, 那小说), 完}

この論理式は「君がその小説を読む、かつ、君がその小説を読むことが完了をする、または君が小説を読むことが完了しない。」と読む。

(77a')の論理式をもとにして(77)の文の論理式を書くと次のようになる。

読ム ～ガ ～ヲ スル ～ガ 完了 マタハ ナイ ～ガ 完了
 (77) ‘看’ (你, u) & 有’ {看’ (你, u), 完} ∨ ～ {有’ {看’ (你, u), 完}

スル ～ガ 完了 マタハ シナイ アラワス ～ガ 完了 ～ヲ
 & 有’ [{看’ (你, u), 完} ∨ ～ 有’ {看’ (你, u), 完}, [様態]]

モツ ～ガ ～ヲ カツ アル ～ニハ ～ガ
 & 有’ ([様態], [疑問]) & 有’ ([疑問], [焦点])

アル ～ガ ～デ アル ～ガ ～デ
 & =’ ([焦点], u) & =’ (u, 那小说)

この論理式は「君が u を読む、かつ、君が u を読むことが完了をする、または、君が u を読むことが完了しない、かつ、「君が u を読むことが完了をする、または、君が u を読むことが完了しない」ことが [様態] を表す、かつ、[様態] が [疑問] という意味をもつ、かつ、[疑問] には [焦点] がある、かつ、[焦点] が u である、かつ、u が “那小说” である」と読む。

さらに、この文の焦点は “那小说” である。その理由は、まず “看完没有” と “那小说?” の間に音声の停頓がない。また、“那小说” の部分は強く発音しない。さらに、“那小说” は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排他性」の性質を持つ文である。“那小说” は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された “主語” の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

3.2.6.2 位置置換焦点が “状況語(大概/已经/还)” の意味操作と論理分析

朱德熙(1984: 160)は「谓词性中心语前边的修饰语是状语。(述語性中心語の前の修飾語は状況語である)」と述べている。ここでこの観点を基に、陆俭明(1980)が挙げていた “状況語” が後ろに置換される文について、論理式を用い分析していく。

次に(78)の文を取りあげる。

(78) 走了吧, 大概。 (行ってしまったでしょう、おそらく。)

(78)は状況語の “大概” が後方置換された文である。この文の本来の形式は(78a)である。

(78)a. 大概走了吧。 (おそらく行ってしまったでしょう。)

(78a)の文の意味は論理式で示すと次の(23a')ようになる。

デカケル ～ガ [完了] [完了]
 (78)a'. 走' (u)&有' {走' (u), 了} &有' (了, 吧)&有' (吧, [様相])
 スル ～ガ ～ヲ ツク ～ニ ～ガ アラワス ～ガ ～トイウ論理形式
 アル ～デ アル ～ガ ～デ
 &有' ([様相], [推量])&有' ([推量], 大概)
 ～トイウ論理形式ガ

この論理式は「uが出かける、かつ、uが出かけることが[完了]をする、かつ、“了”に“吧”がつく、かつ、“吧”が[様相]という論理形式を表す、かつ、[様相]という論理形式の要素が[推量]である、かつ、[推量]が“大概”である。」と読む。

この場合では、後方置換された“大概”は“おそらく”という意味を示す、

(78a')の論理式をもとに、論理式を書くと次の(78')ようになる。

デカケル～ガ [完了]
 (78)' 走' (u)&有' {走' (u), 了}
 スル ～ガ ～ヲ
 [完了]
 &有' (了, 吧)&有' (吧, [様相])
 ツク ～ニ ～ガ アラワス ～ガ ～トイウ論理形式ヲ
 アル ～ガ ～デ アル ～ガ 変項 等シイ ～ガ ～ニ
 &有' ([様相], [推量])&有' ([推量], v)& = ' (v, 大概)
 [様相] トイウ論理形式ノ要素ガ

この論理式は「uが出かける、かつ、uが出かけることが[完了]をする、かつ、[完了]に“吧”がつく、かつ、“吧”が[様相]という論理形式を表す、かつ、[様相]という論理形式の要素が[推量]である、かつ、[推量]が変項“v”である、かつ、“v”が“大概”に等しい」と読む。

また、この論理式の中で“u”は主語を表示する記号であり、“v”は焦点を表す記号の“変項”である。まだ、文中の“吧”は“的”、“吗”と同様の役割をしているので、[様相]と見なし、[様相]の中で、[推量](～するだろう)を表す。中国語の“吧”は

二つの意味を示している。それは[疑問]と[推量]であり、この場合の“吧”は平叙文の中に現れるので[推量]である。

“大概走了吧”という文は統語的にも意味的にも決まっている文で、“大概”は推量を表す副詞であり、本来は変数とすることができない。しかし、“大概”が後ろに回ったことにより、この“大概”は変数“v”にすることができる。さらに、変数“v”に変えた後、“大概走了吧”という文は“走了吧”になる。

さらに、この文の焦点は“大概”である。その理由は、まず“走了吧”と“大概”の間に音声の停頓がない。また、“大概”の部分は強く発音しない。さらに、“大概”は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排除性」の性質を持つ文である。“大概”は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された“状況語”の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

次の(79)を考察する。

(79) 下班了，已经？ (仕事が終わったの？もう) (陆俭明 1980:51)

(79)は状況語の“已经”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(79a)である。

(79)a. 已经下班了？ (もう仕事が終わったのか?)

(79a)の文の意味は論理式で示すと次のようになる。

退勤スル ~ガ スル ~ガ [完了]ヲ

(79)a'. 下班' (u)&有' {下班' (u), 了}

アル ~ガ ~デ 先行スル ~ガ ~ニ 等シイ ~ガ ~ニ

&有' (了, ET)& <' (ET, RT)= ' (RT, 已经)

この論理式は「uが退勤する、かつ、uが退勤することが完了をする、かつ、“了”がETである、かつ、ETがRTに先行する、かつ、RTは“已经”に等しい。」と読む。

(79a')の論理式をもとにして(24)の文の論理式を書くと次のようになる。

退勤スル ～ガ スル ～ガ [完了] ヲ アル ～ガ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ
 (79) '下班' (u)&有' {下班' (u), 了} &有' (了, ET)&<' (ET, RT)

アル ～ガ ～デ マタハ シナイ アル ～ガ ～デ
 & [= ' (RT, v) ∨ ～ {=' (RT, v)}]

アル ～ガ ～デ アル ～ハ 変数 等シイ ～ハ ～ニ
 &=' (v, [焦点])&=' ([焦点], w)&=' (w, 已经)

この論理式は「u が退勤する、かつ、u が退勤することが [完了] をした、かつ、“了” が ET(出来事時間点)である、かつ、ET が RT(参照時間点)に先行する、かつ、「RT が v である、または、RT が v ではない」、かつ、v が [焦点] である、かつ、[焦点] は変数 w である、かつ、w は“已经”に等しい。」と読む。

以上の説明から、後方に置き換えられた文成分はすべて焦点であると考ええる。

このような理論を展開した理由は、文の成分を後ろに回すということは重要な意味上の役割があるからである。その意味上の役割について、陆俭明(1980)は“易位现象(位置置換)”の角度から考察をした。陆俭明(1980)は「形式操作」を説明した。本論では「意味操作」の観点から分析を行った。その具体的な分析内容は位置置換現象と焦点変更現象をしてとらえなおすことである。

次に(80)の状況語の“还(まだ)”について検討する。

(80) 你明天看吗？还？ (君は明日見ますか？まだ？)

(80)は状況語の“还”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(80a)である。

(80)a. 你明天还看吗？ (君は明日まだ見ますか？)

(80a)の文の意味は論理式で示すと次の(80a')になる。

(80)a'. 看' (你)&在' {看' (你), 明天} &有' (明天, 吗)

見ル ～ガ アル ～ガ ～デ ツク ～ニ ～ガ

アラワス ～ガ ～ヲ アル ～ガ ～デ

&有' (吗, [様相])&有' ([様相], [疑問])&有' ([疑問], 还)

[様相] トイウ論理形式ヲ

この論理式は「君が見る、かつ、君が見るのは明日である、かつ、明日に“吗”がつく、かつ、“吗”が[様相]という論理形式を表す、かつ、[様相]の要素が[疑問]である、かつ、[疑問]が“还”である」と読む。

(80a')の論理式をもとにして(25)の文の論理式を書くと次のようになる。

(80) '看'(你)&在' {看'(你), 明天} &有'(明天, 吗)

見ル ~ガ アル ~ガ ~デ ツク ~二 ~ガ

アラワス ~ガ ~ヲ アル ~ガ ~デ

&有'(吗, [様相])&有'([様相], [疑問])

[様相] トイウ論理形式ヲ

アル ~二 ~ガ アル ~ガ ~デ 等シイ ~ガ ~二

&有'([疑問], [焦点])&有'([焦点], u)&='(u, 还)

この論理式は「君が見る、かつ、君が見るのは明日である、かつ、明日に“吗”がつく、かつ、“吗”が[様相]という論理形式を表す、かつ、[様相]の要素が[疑問]である、かつ、[疑問]に[焦点]がある、かつ、[焦点]はuである、かつ、“u”が“还”に等しい。」と読む。

この文の焦点は“还”である。その理由は、まず“你明天看吗”と“还”の間に音声の停頓がない。また、“还”の部分は強く発音しない。さらに、“还”は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排他性」の性質を持つ文である。“还”は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された“状況語”の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

さらに、“还”についてもう一つの例を挙げてみよう。

(81) 少先队员呢, 还? (ピオニールなのに、また)

(81)は状況語の“还”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(81a)である。

(81)a. 还少先队员呢? (ピオニールなのに、また(そういうことをしているの?))

(81a)の文の意味は論理式で示すと次の(81a')のようになる。

(81)a'. 有' (u, 少先队员)&有' (少先队员, 呢)

アル ~ガ ~デ ツク ~二 ~ガ

アラワス ~ガ ~ヲ アル ~ガ ~デ アル ~ガ ~デ
 &有' (呢, [様相])&有' ([様相], [疑問])&有' ([疑問], 还)
 [様相] トイウ [疑問]
 論理形式ヲ

この論理式は「u が“少先队员”である、かつ、“少先队员”に“呢”がつく、かつ、“呢”が[様相]という論理形式を表す、かつ[様相]が[疑問]である、かつ、[疑問]が“还”である」と読む。

(81a')の論理式をもとにして(81)の文の論理式を書くと次のようになる。

(81)' 有' (u, 少先队员)&有' (少先队员, 呢)

アル ~ガ ~デ ツク ~二 ~ガ

アラワス ~ガ ~ヲ アル ~ガ ~デ
 &有' (呢, [様相])&有' ([様相], [疑問])
 [様相] トイウ [疑問]
 論理形式ヲ

アル ~二 ~ガ アル ~ガ 変数デ 等シイ ~ハ ~二
 &有' ([疑問], [焦点])&有' ([焦点], v)& = ' (v, 还)

この論理式は「u が“少先队员”である、かつ、“少先队员”に“呢”がつく、かつ、“呢”が[様相]という論理形式を表す、かつ[様相]が[疑問]である、かつ、[疑問]に[焦点]がある、かつ、[焦点]は変数vである、かつ、“v”は“还”に等しい。」と読む。

さらに、この文の焦点は“还”である。その理由は、まず“少先队员呢”と“还”の間に音声の停頓がない。また、“还”の部分は強く発音しない。さらに、“还”は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排他性」の性質を持つ文である。“还”は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された「状況語」の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

3.2.6.3 位置置換焦点が“受け手主語”の意味操作と論理分析

次に(82)の主語が動作の受け手の場合について考えよう。

(82) 找着了吗, 你的书? (陆俭明 1980 : 47) (探し出しましたか? 君の本を。)

(82)は受け手主語の“你的书”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(82a)である。

(82)a. 你的书找着了吗? (君の本は見つかりましたか?)

(82a)の文の意味は論理式で示すと次のようになる。(式の一部は簡略表記した。)

サガシ ～ガ ～ヲ スル ～ガ [完了] ツク ～ニ ～ガ
(82)a'. 找着' (你, 你的书)&有' {找着' (你, 你的书), 了} &有' (了, 吗)

アラワス ～ガ ～ヲ アル ～ガ ～デ
&有' (吗, [様相])&有' ([様相], [疑問])
[様相] トイウ [様相] トイウ [疑問]
論理形式ヲ 論理形式の要素ガ

この論理式は「君が君の本を探しだす、かつ、君が君の本を探し出すことが完了をする、かつ、[完了]に“吗”がつく、かつ、“吗”が[様相]という論理形式を表す、かつ、[様相]という論理形式の要素が[疑問]である。」と読む。

(82a')の論理式をもとにして(82)の文の論理式を書くと次のようになる。

サガシ ～ガ～ヲ スル ～ガ [完了] ヲ ツク ～ニ ～ガ
(82)' 找着' (你, u)&有' {找着' (你, u), 了} & 有' (了, 吗)

アラワス ～ガ ～ヲ カツ アル ～ガ ～デ アル ～ニハ ～ガ
&有' (吗, [様相])&有' ([様相], [疑問])&有' ([疑問], [焦点])
[様相] トイウ [様相] トイウ
論理形式ヲ 論理形式の要素ガ

アル ～ガ ～デ アル ～ガ ～デ
&=' ([焦点], u)&=' (u, 你的书)

この論理式は「君が u を探し出し、かつ、君が u を探しだすことが [完了] をする、かつ、[完了] に “吗” がつく、かつ “吗” が [様相] という論理形式を表す、かつ、[様相] という論理形式の要素が [疑問] である。かつ、[疑問] には [焦点] がある。かつ、[焦点] が u である。かつ、 u が “你的书” である。」と読む。

さらに、この文の焦点は “你的书” である。その理由は、まず “找着了吗” と “你的书” の間に音声の停頓がない。また、“你的书” の部分は強く発音しない。さらに、“你的书” は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排除性」の性質を持つ文である。

“你的书” は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された “受けて主語” の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

3.2.6.4 位置置換焦点が “前置詞句” の意味操作と論理分析

ここでは、前置詞句が後方置換された例をとり挙げる。

(83) 买了没有，给我？ (買いましたか？私に。)

(83)は前置詞句の “给我” が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(28a)である。

(83)a. 给我买了没有？ (私に買ってくれましたか？)

(83a)の文の意味は論理式で示すと次のようになる。

買ウ ～ガ ～ヲ スル ～ガ ～ヲ

(83)a'. 给' [u , 我, 买' (u , v)&有' {买' (u , v), 了}]

スル ～ガ ～ニ [完了]

～コトヲ

ツク ～ニ ～ガ アラワス ～ガ ～ヲ アル ～ガ ～デ

&有' (了, 没有)&有' (没有, [様相])&有' ([様相], [疑問])

この論理式は「 u が私に u が v を買うこととする、かつ、 u が v を買うことが完了することをする、かつ、“了” に “没有” がつく、かつ、“没有” が [様相] という論理形式を表す、かつ、[様相] という論理形式の要素が [疑問] である。」と読む。

(83a')の論理式をもとにして(83)の文の論理式を書くと次のようになる。

買ウ ～ガ ～ヲ スル ～ガ [完了]
 (83) 给' [u, 我, 买' (u, v)&有' {买' (u, v), 了}

スル ～ガ ～ニ ～コトラ

ツク ～ニ ～ガ アラワス ～ガ ～ヲ アル ～ガ ～デ
 &有' (了, 没有)&有' (没有, [様相])&有' ([様相], [疑問])

アル ～ニ ～ガ アル ～ガ ～デ アル ～ガ ～デ
 &有' ([疑問], [焦点])&=' ([焦点], w)&=' (w, 给我)

この論理式は「u が私に、u が v を買う、かつ、u が v を買うことが完了することをする、かつ、“了”に“没有”がつく、かつ、“没有”が[様相]という論理形式を表す、かつ、[様相]の要素が[疑問]である、かつ、[疑問]に[焦点]がある、かつ、[焦点]が w ある、かつ、w が“给我”である。」と読む。

この文の焦点は“给我”である。その理由は、まず“买了没有”と“给我”の間に音声の停頓がない。また、“给我”の部分は強く発音しない。さらに、“给我”は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排除性」の性質を持つ文である。“给我”は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された“前置詞句”の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

次も前置詞句が移動された例を考えよう。

(84) 我鞠了个躬，给他。 (私はお辞儀をした、彼にね。)

(84)は前置詞句の“给他”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(84a)である。

(84a). 我给他鞠了个躬。 (私は彼にお辞儀をしました)

(84a)の文の意味は論理式で示すと次の(84a')のようになる。

スル ～ガ オ辞儀ヲ アル ～ガ イチド

(84)a'. 给' [我, 他, 鞠' (我, 躬)] &有' {鞠' (我, 躬), 个}

スル ～ガ ～二

イタル ～ガ ～二 スル ～ガ [完了] ヲ

&到' (个, 他)&有' {到' (个, 他), 了}

～コトヲ

この論理式は「私が、彼に、私がお辞儀をする、かつ、私がお辞儀をすることが一度ある、かつ、一度が彼にいたる、かつ、一度が彼にいたることが完了をする。」と読む。

(84a')の論理式をもとにして(84)の文の論理式を書くと次のようになる。

スル ～ガ オ辞儀ヲ アル ～ガ イチド

(84)' 给' [我, 他, 鞠' (我, 躬)] &有' {鞠' (我, 躬), 个}

スル ～ガ ～二

イタル ～ガ ～二 スル ～ガ [完了] ヲ

&到' (个, 他)&有' {到' (个, 他), 了}

～コトヲ

ツク ～二 ～ガ アル ～二 ～ガ

&有' (了, [様相])&有' ([様相], [焦点])

[様相] トイウ論理形式

アル ～ガ ～デ 等シイ ～ガ ～二

&有' {[焦点], p' (…, 他)} &=' {p' (…, 他), 给他}

この論理式は「私が、彼に、私がお辞儀をする、かつ、私がお辞儀をすることが一度ある、かつ、一度が彼にいたる、かつ、一度が彼にいたることが[完了]をすることを。かつ、[完了]に[様相]という論理形式がつく、かつ、[様相]の要素に[焦点]がある、かつ、[焦点]がp' (…, 他)である、かつ、p' (…, 他)は“给他”に等しい。」と読む。

さらに、この文の焦点は“给他”である。その理由は、まず“他们走了”と“给他”の間に音声の停頓がない。また、“给他”の部分は強く発音しない。さらに、“给他”は

文末に置かれるからであり、「－突出性」・「－排他性」の性質を持つ文である。“给他”は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された“前置詞句”の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

3.2.6.5 位置置換焦点が“主語と前置詞句”の意味操作と論理分析

次に主語と前置詞句の両方が後置される例を考察しよう。

(85) 滚吧，你给我！ (出ていけ、君が私に(君がここから)！)

(85)は主語と前置詞句の“你给我”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(85a)である。

(85)a. 你给我滚吧！ (出ていってくれ！)

(85a)の文の意味は論理式で示すと次の(85a') になる。

出テイク ～ガ イタル ～ガ ～二

(85)a'. 给' [你，我，滚' (你)& 到' {滚' (你)，我}

スル ～ガ ～二 ～コトラ

ツク ～二 ～ガ アラワス ～ガ ～ヲ

&有' [到' {滚' (你)，我}，吧] &有' (吧，[命令])]

この論理式は「君が私に、君が出ていく、君が出ていくことが私にいたることをする、かつ、君が出でゆくことに“吧”がつく、かつ、“吧”が[命令]を表す。」と読む。

(85a')の論理式をもとにして(85)の文の論理式を書くと次のようになる。

出テイク ～ガ イタル ～ガ ～二
 (85) 給' [你, 我, 滾' (你)& 到' {滾' (你), 我}
 スル ～ガ ～二 ～コトヲ

ツク ～二 ～ガ アル ～ガ ～デ アル ～二 ～ガ
 &有' [到' {滾' (你), 我}, 吧] &有' (吧, [命令]) &有' ([命令], [焦点])

アル ～ガ ～デ ヒトシイ ～ガ ～二
 &有' {[命令], p' (你, 我, …)} &=' [p' (你, 我, …), 你给我]

この論理式は「君が私に、君が出ていく、かつ、君が出ていくことが私にいたることをする、かつ、君が出でゆくことに“吧”がつく、かつ、“吧”が[命令]という論理形式を表す、かつ、[命令]が函数p' {你, 我, …}である、かつ、函数p' (你, 我, …)が“你给我”に等しい。」と読む。

さらに、この文の焦点は“你给我”である。その理由は、まず“滚吧”と“你给我”の間に音声の停頓がない。また、“你给我”の部分は強く発音しない。さらに、“你给我”は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排他性」の性質を持つ文である。

“你给我”は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された“主語と前置詞句”の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

3.2.6.6 位置置換焦点が“都”（範囲副詞/既に）の意味操作と論理分析

まず、範囲副詞の“都”を考える。

(86) 他们走了, 都。 (彼らは出かけた、皆で。)

(86)は“都”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(86a)である。

(86)a. 他们都走了。 (彼らは皆出かけた。)

(86a)の文の意味は論理式で示すと次の(86a')になる。

デカケル ～ガ スル ～ガ [完了] ヲ ツク ～二 ～ガ
 (86)a'. 走'(他们)&有' {走' (他们), 了} & 有' (了, [様相])

アラワス ～ガ ～ヲ アル ～ガ ～デ
 &有' ([様相], [範囲])&有' (範囲), 都)

この論理式は「彼らが出かける、かつ、彼らが出かけることが[完了]をする、かつ、“了”に[様相]という論理形式がつく、かつ、[様相]の要素が[範囲]を表す、かつ、[範囲]が“都”である。」と読む。

(86a')の論理式をもとにして(86)の文の論理式を書くと次のようになる。

デカケル～ガ スル ～ガ [完了] ヲ ツク ～ニ ～ガ
 (86)' 走'(u)&有' {走' (u), 了} & 有' (了, [様相])
 [様相] トイウ論理形式

アラワス ～ガ ～ヲ アル ～ニ ～ガ
 &有' ([様相], [範囲])&有' (範囲), [焦点])

アル ～ガ ～デ 等シイ ～ハ ～ニ
 &=' ([焦点], v)&=' (v, 都)

この論理式は「uが出かける、かつ、uが出かけることが[完了]をする、かつ、“了”に[様相]という論理形式がつく、かつ、[様相]の要素が[範囲]という意味を表す、かつ、[範囲]に[焦点]がある、かつ、[焦点]が変数vである、かつ、vは“都”に等しい。」と読む。

王力(2011)の《中国現代語法》は「“都”は主語の範囲を指す機能を持つ」と主張している。朱德熙も王力と同じように、“都”は「範囲の副詞を表す。(标举它前边词语的范围)」(朱德熙 1982:196)と述べている。ここでは二人の研究者の観点を参考にし、“都(みんな)”は範囲を指すと考える。

さらに、この文の焦点は“都”である。その理由は、まず“他们走了”と“都”の間に音声の停頓がない。また、“都”の部分は強く発音しない。さらに、“都”は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排他性」の性質を持つ文である。“都”は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された“範囲副詞”の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

次に、“都(既に)”について考えよう。

(87) 快起床吧，八点了，都！（早く起きろ、八時だ、既に！）

(87)は状況語の“都”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(87a)である。

(87)a. 快起床吧，都八点了。 (早く起きろ、既に八時だ。)

(87a)の文の“都八点了”の意味は論理式で示すと次の(87a')のようになる。

アル ～ガ ～デ シタ ～ガ [発生] ヲ
 (87)a'. 有' ([時間], 八点)&有' { 有' ([時間], 八点), 了 }

アル ～ガ ～デ 先行スル ～ガ ～ニ アル ～ガ ～デ
 &有' (了, ET)&<' (ET, RT)= ' (RT, 都)

この論理式は「[時間] が八時である、かつ、[時間] が八時であることが [発生] をした、かつ、[発生] が ET(出来事時間点)である、かつ、ET が RT(参照時間点)に先行する、かつ、RT が“都”である。」と読む。

(87)a'. この論理式をもとにして(87)の文の論理式を書くと次のようになる。

アル ～ガ ～デ シタ ～ガ [発生] ヲ アル ～ガ ～デ
 (87)' 有' ([時間], 八点)&有' {有' ([時間], 八点), 了 } & 有' (了, ET)

先行スル ～ガ ～ニ アル ～ニ ～ガ アル ～ガ ～デ 等シイ ～ガ ～ニ
 &<' (ET, RT)= ' (RT, [焦点])&有([焦点], u)&=' (u, 都)

この論理式は「[時間] が八時である、かつ、[時間] が八時であることが [発生] をした、かつ、[発生] が ET(出来事時間点)である、かつ、ET が RT(参照時間点)に先行する、かつ、RT に [焦点] がある、かつ、[焦点] が u である、かつ、u が“都”に等しい。」と読む。

さらに、この文の焦点は“都”である。その理由は、まず“八点了”と“都”の間に音声の停頓がない。また、“都”の部分は強く発音しない。さらに、“都”は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排他性」の性質を持つ文である。“都”は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された“状況語”の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

3.2.6.7 位置置換焦点が“就(もう)”の意味操作と論理分析

杉村博文(1994:112)は、已然の事態を表すとき、接続副詞“就”は発生の“了”と相性がよく、“～就……了”という表現を作る。ここでは、例を挙げると(88)のようになる。

(88) 怎么? 你走了? 就? (え? 君行くの? もう?)

(88)は“就”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(88a)である。

(88)a. 你就走了? (君はもう行くの?)

(88a)の文の意味は論理式で示すと次のようになる。

[完了]

(88)a'. 走' (你)&有' {走' (你), 了} &有' (了, [様相])

行ク ~ガ シタ ~ガ ~ヲ ツク ~ニ

&有' ([様相], [疑問])&有' ([疑問], 就)

アル ~ガ ~デ アル ~ガ ~デ

この論理式は「君が行く、君が行くことが[完了]をする、かつ、[完了]に[様相]という論理形式がつく、かつ、[様相]が[疑問]である、かつ、[疑問]が“就”である。」と読む。

(88a')の論理式をもとにして(88)の文の論理式を書くと次のようになる。

[完了]

(88)' 走' (u)&有' {走' (u), 了} &有' (了, [様相])

行ク ~ガ シタ ~ガ ~ヲ ツク ~ニ ~ガ

アル ~ガ ~デ アル ~ニ ~ガ

&有' ([様相], [疑問])&有' ([疑問], [焦点])

アル ~ハ ~デ 等シイ ~ハ ~ニ

&有' ([焦点], u)&=' (u, 就)

この論理式は「君が行く、君が行くことが[完了]をした、かつ、[完了]に[様相]という論理形式がつく、かつ、[様相]が[疑問]である、かつ、[疑問]に[焦点]がある、かつ、[焦点]は変数“u”である、かつ、“u”が“就”に等しい。」と読む。

さらに、この文の焦点は“就”である。その理由は、まず“怎么? 你走了?”と“就”の間に音声の停頓がない。また、“就”の部分は強く発音しない。さらに、“就”は文

末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排除性」の性質を持つ文である。

“就”は焦点定義の条件を満たしたことによって、後方置換された“就”の部分は「位置置換焦点」と見なすことができる。

3.2.6.8 位置置換焦点が“快(まもなく)”の意味操作と論理分析

(89) 电影开演了, 快。 (映画は始まります, まもなく。)

(89)は“快”が後方置換された文である。この文の本来の形式は次の(89a)である。

(89)a. 电影快开演了。 (映画はまもなく始まります。)

この文の意味は論理式で示すと次のようになる。

(89)a'.

カイエンスル ~ガ スル ~ガ [発生] ヲ アル ~二 ~ガ アル ~ガ ~デ
开演' (电影)&有' {开演' (电影), 了} &有' (了, [様相])&有' ([様相], 快)

この論理式は「映画が開演する、かつ、映画が開演することが[発生]をする、かつ、“了”に[様相]という論理形式がある、かつ、[様相]が“快”である」と読む。

(89a')この論理式をもとにして(89)の文の論理式を書くと次の(89')になる。

スル ~ガ スル ~ガ [発生] ヲ アル ~二 ~ガ
(89)' 开演' (电影)&有' {开演' (电影), 了} & 有' (了, [様相])
アル ~二 ~ガ アル ~ガ ~デ 等シイ ~ガ ~二
&有' ([様相], [焦点])&有' ([焦点], u)&=' (u, 快)

この論理式は「映画が開演する、かつ、映画が開演することが[発生]をする、かつ、“了”に[様相]という論理形式がある、かつ、[様相]に[焦点]がある、かつ、[焦点]は変数“u”である、かつ、“u”が“快”に等しい。」と読む。

さらに、この文の焦点は“快”である。その理由は、まず“电影开演了”と“快”の間に音声の停頓がない。また、“快”の部分は強く発音しない。さらに、“快”は文末に置かれるからであり、「一突出性」・「一排除性」の性質を持つ文である。“快”は焦点定義の条件を満たしたことによって、「位置置換焦点」と見なすことができる。

3.2.6.9 本節のまとめ

本節では、陆俭明(1980)が主張している「位置置換現象」の意味を中心に参考し、「意味操作」の角度に着目にして「位置置換現象」を考察する。その結果「後方置換部分」は「位置置換焦点」と見なすことができることが明らかになった。また、後方置換部分」は「－突出性」・「－排他性」の性質を持つ焦点文である。

3.3 本章のまとめ

本章では、主に焦点について分析してきた。それは“是……的”構文の「焦点」と「位置置換文」における「焦点」である。“是……的”構文は「排他性」・「突出性」を持つ焦点文であり、「位置置換文」は「突出性」・「排他性」を持たない焦点文である。

まず、“是……的”構文の特徴は“是”後の焦点は「＋突出性」・「＋排他性」の焦点であり、“是”の直後の直接に当たらない成分は「－突出性」・「－排他性」である。そして、「位置置換文」の特徴は「アクセントが前の部分は平叙文に発音する、後ろの部分は平叙に発音するままで可能。」であり、この文の「焦点」は「－突出性」・「－排他性」であると証明してきた。

第4章 時態成分“了”が共起する場合の意味と論理分析

4.0 はじめに

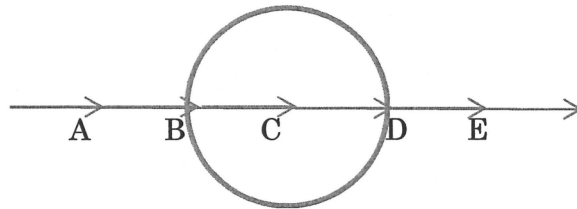
この章では時態成分“了”について述べる。時態を表す成分“了”が“是……的”構文に共起する場合、文の構成、及び意味解釈などを詳細に説明する。現代中国語の時態については各研究者の着眼点が異なり、注目すべきなのは龚千炎(1995)と陈平(1988)の観点である。

まず、龚千炎(1995)が著した《汉语的时相时制时态》は「中国語の時間体系は“文の時制構造”、“文の時相構造”、“文の時態構造”によって構成される」とする。ここでは主に“時態構造”の見解を参照しながら分析していきたい。また、陈平(1988)も時間体系について検討を行っているので、この両者を統合し、さらに構成性の原理に従って、時態の中で已然を表す成分について、論理式で記述する。

4.1 時態とは

4.1.1 陈平(1988)の時態の捉え方

一方、陈平(1988)は「時態が現れるのは状態に関するさまざまな方式を観察し、情態がある段階にある特定の状態を指す場合である。時態は「已然時態」、「単純時態」と「未然時態」である。(p. 20)」と述べた。次の〈図 4-1〉で示した。



〈図 4-1：時間軸〉

(陈平 1988:420 参照)

陈平(1988)によれば、上の〈図 4-1〉時間軸上のアルファベットは状況の各発展段階を表す。その中の“B”と“D”はそれぞれ状況の“起始点”(開始点)と“终结点”(終息点)となる。

また、発話者は各発展段階への着目によって、二つの結果が得られる。

- 〈Ⅰ〉 Bを基準とすると、Bより前の状態を「未然態」と呼ぶ、Bより後のものを「已然態」と呼ぶ。
- 〈Ⅱ〉 Dを基準とすると、一組は 状況が Dに到達する前のある各段階を指し、よく用いられる助詞は“了”、“起来”、“下去”や“着”などである。もう一組は状況が Dに到達した後に現れた各種の状態を示し、よく用いられる助詞は“过”、

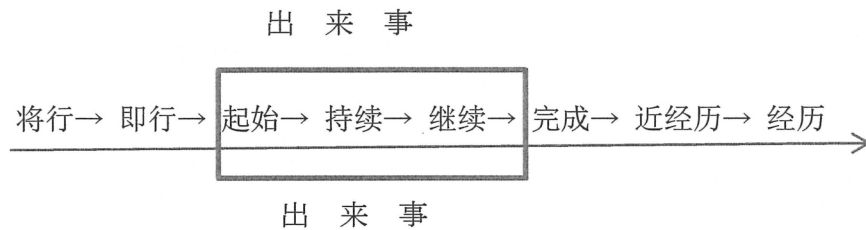
“来着”や“了”などである。

4.1.2 龚千炎(1995)の時態の捉え方

龚千炎(1995)時態は現代中国語における時態を以下の八種類に分ける。(ページ数は龚千炎(1995)の引用ページを表す。日本語訳は筆者による。)

- 〈I〉「完了・実現時態(完成・实现时态)」は、動作行為の変化がすでに発生、進行、完了しているか或いは状況、状態がすでに存在、実現していることを表している。(这种时态是指动作行为变化在此之前已经发生、进行、完成了,或情况状态在此之前已经存在、实现了。)(p. 72)
- 〈II〉「経験時態(经历时态)」は、動作行為の変化がかつて発生、進行していたことを表すが、状況の状態がかつて存在していたことも示す。(这种时态是指动作作为变化在此之前曾经发生、进行时,或情况状态在此之前曾经存在过。)(p. 80)
- 〈III〉「近経験時態(近经历时态)」は、それほど遠くない過去にある出来事、或いは状況が発生したことを表す。(这种时态是指不久之前发生过某一事件或情况。)(p. 87)
- 〈IV〉「進行・持続時態(进行、持续时态)」は、動作行為の変化が今ちょうど進行しているところ、或いは状況状態の持続を表す。(这种时态是指动作行为变化正在进行或情况状态的持续。)(p. 89)
- 〈V〉「開始時態(起始时态)」は、動作行為の開始、或いは状態の変化の開始を表す。(这种时态是指动作行为的起始或情况状态的变化性的起始。)(p. 97)
- 〈VI〉「継続時態(继续时态)」は、動作行為の継続進行、或いは状態状況の継続した発展を表している。(这种时态是指动作行为的继续进行或情况状态的继续发展。)(p. 101)
- 〈VII〉「将来時態(将行时态)」は、動作行為の変化が間もなく発生、或いは状態状況が間もなく現れることを表すことである。(这种时态是指动作行为变化将要发生或情况状态将要出现。)(p. 105)
- 〈VIII〉「近将来時態(即行时态)」は、動作行為の変化がもうすぐ発生、或いは状態状況が間もなく出現することを表す。(这种时态是指动作行为变化即将发生或情况状态即将出现。)(p. 106)

龚千炎(1995)は上の八種類の時態が現代中国語の時間体系において、「時態チェーン」(“时态链”)を構成していると主張し、そしてこの「時態チェーン」は現代中国語において時間表現の面から十分に科学性と精密性を現わすと述べた。次の〈図 4-2〉で示した。



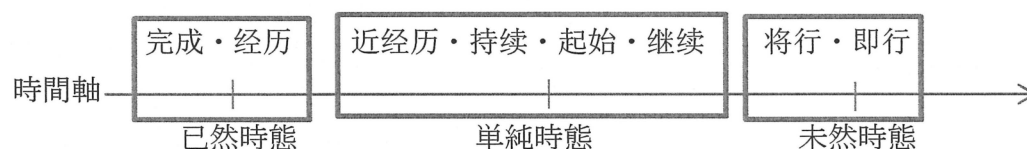
〈図 4-2：時態チェーン〉

(龚千炎 1995：110 参照)

4.1.3 本論文の時態の捉え方

以下では、陈平(1988)と龚千炎(1995)を統合し、さらに構成性の原理に従って論理式で記述する。つまり、本研究では時態「已然時態」と「未然時態」によって構成されるだけではなく、「単純時態」(陈平 1988)も存在していると考え、ここでは、「時態」に対してその分類を検討する。

まず、〈Ⅰ〉の「完了・実現時態(完成・实现时态)」と〈Ⅱ〉の「経験時態(经历时态)」は「已然時態」に属す。次に、〈Ⅲ〉の「近経験時態(近经历时态)」、〈Ⅳ〉の「進行・持続時態(进行、持续时态)」、〈Ⅴ〉の「開始時態(起始时态)」と〈Ⅵ〉の「継続時態(继续时态)」は「単純時態」に属す。最後に、〈Ⅶ〉の「将来時態(将行时态)」と〈Ⅷ〉の「近将来時態(即行时态)」は「未然時態」に属すと分類する。これを〈図 4-3〉で示すと以下ようになる。



〈図 4-3：「時態の分類図」〉

4.2 時態成分の“了”に関する考察

ここから、この八種類の中に「完了・実現時態」を表す已然成分の“了”の役割と意味について検討する。

本論では、吕叔湘(1980)、张晓玲(1986)、刘勋宁(1988)、杉村博文(1994)、龚千炎(1995)“了”に関する研究を紹介し、主として龚千炎(1995)の観点に基づき分析する。理由は、龚千炎(1995)は時態の角度から“了”を分析したからである。

また、ここでも第二章の「格役割演算」、「時間点演算」、「様相演算」、「焦点演算」の四つの過程を考察して、意味と論理を検討する。第二過程の「時間点演算」の部分において、明確的に時間点を示すため、陈平(1988: 417-419)と龚千炎(1995: 34-35)の

考えを導入し、「参照時間点(RT)」、「出来事時間点(ET)」、「発話時間点(ST)」の位置についてそれぞれを図示する。

4.2.1 呂叔湘(1980)の記述

呂叔湘(1980)の《現代汉语八百詞》は“了”の文中の“位置”と“機能の相違”によって、助詞の“了”を時態助詞“了₁”と語気助詞“了₂”に分けた。

4.2.2 張曉玲(1986)の記述

張曉玲(1986)は「一般的に“了”は二種類に分けられ、それは文中の“了”と文末の“了”である。文中の“了”は動詞の後ろに使い、主に動作の完成を表す。文末の“了”は主に事態に変化が現れることを肯定し、或いはまもなく変化が現れる文になる作用がある。(張曉玲 1986:50)」と述べた。

4.2.3 劉勛寧(1988)の記述

劉勛寧(1988)は普通話に用いられる動詞接辞の“了”を“實現體”[實現相]を表すマーカーであると主張し、その論旨は次の2点に要約される。

- ・ “完成義”不是“了”本身固有的语义特征。
「“完成”という意味は“了”それ自体の固有の意味特徴ではない。」
- ・ “了”应当看作“實現體”标志。它的语法意义是表明动词，形容词和其他谓词形式的词义所指处于事实的状态下。

「“了”は“實現相”のマーカーと見なされるべきである。“了”の文法意味は、動詞や形容詞やその他の述詞形式の語彙的意味が表すところのものが事実の状態にあるということを表すものである。」

4.2.4 杉村博文(1994)の記述

杉村博文(1994)は「“了”を動詞後ろの“了”と文末の“了”の二つに分け、動詞後ろの“了”は實現助詞であり、文末に置かれる“了”は発生助詞である」と述べた。

まず、動詞後ろの“了”が實現助詞の場合について、杉村博文(1994)は以下のように主張した。

例えば、“我买了一本儿汉日词典”という文において、“了”は動詞あるいは形容詞に後接して行為や状態の「實現」を表す助詞である。

「實現」の“了”の表す「實現」という概念は純粹に行為や状況の實現のみを表し、過去・現在・未来という「時制」や、発話時といった「特定時」とは一切関係ないと述べた。
(杉村博文 1994 : 37.45)